
孤独

朱雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独

【Nコード】

N1869T

【作者名】

朱雀

【あらすじ】

主人公、直江大和は誰よりも孤独だった

孤独の理由は生まれつき妖怪が見えてしまうのだ。

大和はあそこに妖怪が居ると言ったが霊感がまったくない人間達には見えず、よく大和の事を嘘つきと呼ばれており孤独だった

主人公&大和に好意を持つ妖怪&友人帳&仲間&特殊能力&反魂の術紹介

主人公紹介

直江大和

性別 男性

好きな物 ヤドカリ、イカサマをすること

特殊能力 霊力が強く妖怪の姿が見えてしまう、霊能者は自由にお金を出す事が出来る、反魂の術で死者を蘇らせる事が出来る。(ただし、不老不死ではない。)、髪が伸びるのが早い

長所 霊能者はお金を無限に出す事が出来てお金に困る事など無い
短所 お金を出す事が出来るが、出し過ぎると自分の体が不老不死化して死ぬ事も老ける事も出来ない永遠の苦しみを味わう事になる。
ただし、その代りに霊力が増し、妖怪&人間相手にも誰にも負けない力が搭載される

技

武器無しの状態

滅波動

打技黒掌

魔神菩薩連掌

武器ありの場合

飛連斬 特技

双連撃 特技

幻影刃 特技

月閃光 特技

千裂虚光閃 奥義 短剣で敵を打ち上げ、神速の5連突きを繰り出す

粉塵裂破衝 奥義

崩龍斬光剣 奥義

魔人千裂衝 秘奥義

浄破滅焼闇

翔破裂光閃

義憐聖霊斬

真神煉獄刹

大和に好意を持つ事になる妖怪

斑

人間ver リンフォースアインス

3サイズ B 120/W 63/H 91

好きな者 直江大和

斑は最初は誰も好きになる事など無いと思われたが大和にだけは違った。

妖怪&人間相手でも優しく、そして誰よりも孤独な大和に好意を持つ事になる

笹舟

3サイズ B 118/W 63/H 91

好きな者 直江大和

嫌いな者 直江大和以外の人間

笹舟は人魚でやはり斑と同様人間嫌いだった
だが大和はいつも自分に優しく接してくれた
最初は自分の血を飲み不老不死が目的だと思い好かれる事は無かった
だが大和は既に不老不死で誰よりも孤独だった
大和は不老不死が目的で自分に優しく接したのではないとわかりど
んとんと好かれる事になる。

友人帳

この紙に名が書かれている妖は、友人帳の持ち主に名を呼ばれると
逆らうことができない。また、名が書かれている紙を燃やされたり
破かれたりすると同じ目に遭う。そのため、名を奪われたものは命
を握られたも同じであり、友人帳を手に入れば多くの妖を従えるこ
とが出来ることとなる。真に友人帳を扱えるのは直江大和だけで、
少なくとも「名を返す」という行為は大和の唾液と息を必要とし、
名を返した後はひどく疲れを催す。

妖怪が見える人間

名取周一

人気俳優。

大和と同じように妖が見える。
皮膚にヤモリの形をした妖がついていて、動き回る。古くは抜い人
の家系で、妖抜い人も請け負っている。

反魂の術紹介

これは死者を一度だけ蘇らせる事が出来る。

だが問題もある

問題は骨が見つからないといけないのだ

そして死んだ人間が生き返る事を望んでいなければ反魂の術はしても生き返らない

川神百代の恋人紹介

川神百代の恋人紹介

石田三郎

身長 170センチ

誕生日 2月27日

武術 刀

一人称 俺

あだ名 御大将

血液型 A型

職業 天神館 2 - 1

家庭 石田鉄鋼 頭取

趣味 鉄道模型

大切なもの 家の名誉、川神百代

苦手なもの 妖怪、幽霊

西方十勇士で総大将の最強の男である川神百代と互角以上に戦う事

が出来る唯一の男で

三郎は強い奴と戦いたくてウズウズしていたが、皆弱すぎだった
だが、川神百代との戦いが楽しくていつの間にか恋心を持つようにな
る

そして告白をして無事成功した。

失恋

?????。「、、、、、、、、。」と一人の男性が涙を流しながら歩いていた

その男性の名は直江大和である

何故涙を流している理由は最大のショックがあったのだ

直江大和はあの最強の武神の川神百代に告白をしたが

最大の失恋をしてしまったのだ

、最高の友達のままではないか？、

大和の脳裏で何度も何度も繰り返す

そして

島津寮に到着した大和はすぐに寝室に行った

すると

?????。「戻ったか。、、、、どうした？元気が無いぞ。」と声が聞こえて来た

大和「斑か。まあね、確かに元気が無いかもな。」と言った

こいつの名は斑

正体は、妖の間で名の知れた上級の強力な妖「斑」で、大きな白い獣の姿をしている。

だが

霊力が全くない人間には斑や他の妖怪を見る事は出来ない

斑との出会いはこうだ

自分が小学校1年生の頃

自分の部屋を整理していたら「友人帳」という物が見つかった

最初はただのノードだろと思って気にする事は無かった

だが

小学校の帰り道

一人で下校している時だった

????? 「人間よ、今持っている友人帳を渡せ。」と白くて大きい獣が現れた

それこそが斑だった

大和「これ？友人帳ってなに？何に使う物なの？、それに君の名前って何？」と言った

斑「私の名は斑という。そして友人帳に名が書かれている妖は、友人帳の持ち主に名を呼ばれると逆らうことができない。まあ、悪さをしないようにする為だ。」

大和「ふうん、そうなんだ、、、でこれをあげると何か悪い事でもするんじゃないの？」と言った

斑「さあな、それはお前には関係ない。」と言って大和を押し倒して口を大きく開けて襲ってきた

だが

ゴツチン

鈍い音がした

大和が斑の頭に拳骨を食らわせたのだ

斑は頭が痛いのか頭を押さえていた

斑「痛い！」と言った

大和「悪いけど悪い事するのなら渡す事は出来ないよ。」と言って去ろうとした

だが

斑「それを持っている者はな妖怪に襲われるのだぞ！それでも良いのか？」と言った

大和「うーん、それはちょっと困るな。じゃあ、君が僕の用心棒になって。ね？駄目？」と斑に近付きウルウルの状態で言った

斑「し、仕方が無い。私が用心棒になってやるう。」と言って大和の用心棒になった

それが斑との出会いだった

だが会った事で大和の事が分かって来た

大和は誰よりも孤独だという事を

妖怪の姿を見えてしまう事で自分を嘔吐きと言われていて誰も大和の事を信じる者などいなかった

そして

一人になった時

風間翔一という人間に会い

そして

義姉の川神百代を仲間にして

次々と仲間が増え風間ファミリーという集団を作り孤独ではなくなつたと思われた

しかし

そうではなかった

斑「で、何故元気が無いのだ？」と聞いてみた

大和「それは、姉さんに振られちゃったからだよ。」

斑「姉さんだと？、ああ、義姉の川神百代とか言うあの女にか？それは残念だったな。大和、気持ちを切り替えた方が良い。そうしないと辛くなるぞ。」

大和「分かっているよ。でも、そう簡単に切り替えなど出来ない。」

斑「なら、少しずつで良い。少しずつ気持ちを切り替える。」

大和「斑、分かった。いつも励ましてくれて有難うな。」と言った

斑「まあ、用心棒だしな。心配するに決まっている。」と言って大和を自分の体で包み込んだ

大和はその温かくゆっくりと眠りに着いたのだった

大和が自分に包まれている状態で熟睡状態になった時

斑はこう思った

斑「（やはり、お前は孤独なんだな。誰にも愛されずにいる。私がお前の傍に居よう、ずっと。）」と思った

西方十勇士

振られてから1日後

大和は完全にはいれないが斑のおかげで元気になった

大和はいつも通り

風間ファミリーと共に登校した

途中で川神姉妹と合流して

百代「おはよう、皆！」

一子「おはよう！」と元気よく挨拶をした

川神姉妹が合流して共に登校した時

斑の声が聞こえて来た

そう

斑が大和の後を追っているからなのだ

大和が心配で

斑「おい、大和。」

大和「なに？」と言った

斑「あの川神百代とかいう女、やけに元気だな。お前を振ったくせ

に。普通、振った女も振ってしまった男性に傷付いたんじゃないのかと心配で元気が無いのが当然なんだが。」

大和「うん、そうだね。」

斑「そうだねってお前は気にしないのか？あんなに好きだったのに。」

大和「今も好きだよ。でも、いつまでも気にしていたってしようがないでしょう。」

斑「そうだな。」と言った

すると

岳人「ん？なあ、大和。」

大和「ん？なんだ？」

岳人「誰と話しているんだ？」と言った

そう

風間ファミリィは大和以外霊力が全くなく斑の姿が見えないのだ

大和「え？俺は誰も話してないぞ、岳人の気のせいだろ。」と言った

その時だった

多摩橋（変態橋）に十人の人が集まっていた

そして

刀を持った男が百代を見て来た

?????「お前が川神百代か？」

百代「いかにも。」

????? 「俺は西方十勇士の総大将の石田三郎だ。」と自己紹介をした

すると

師岡「え！西方十勇士の総大将だって！」と師岡が言った

一子「モロ、知っているの？」

師岡「知っているよ。っていうか知らない人なんて居ないよ。西方十勇士は一度も負けた事が無い最強のチームで最も強い人は総大将の石田三郎さんなんだ。」

一子「へえ、結構強いんだ。私も勝負したいわ。」と言った

すると

勝負しようとした時

西方十勇士の一人だろうか

何か言ってきた

????? 「大将、時間がありませんので対決時間は5分にしてくださいね。」

石田「ああ、分かっている」と言って刀を抜いた

石田「俺は今まで雑魚い奴等と勝負してきた。だが、お前となら楽しめそうだな。」

百代「さあ、かかってこい！」と構えた

すると

石田三郎から攻撃を仕掛けて来た

百代「早い!!」と一応回避したがどんどんと百代が圧され始めて
いる

一子「お姉様!」と心配をしたが

百代「っはあああ!」と百代も攻撃をした

二人は互角以上だった

そして

良い対決をしていた時だった

?????「大将、時間切れです。」と言った

石田「っち!此処までか。川神百代、時間切れだ。悪いがこの勝負
預けるぜ。」と言って10人を従えて去って行った。

一子「お姉様、大丈夫?」と一子が近寄って来た

百代「ああ、大丈夫だ。しかし、ゝ。」

一子「しかし?」

百代「いや、何でもない。さあ、学校に行くぞ。」

一子「うん!」と言った

百代「(ようやく、私を満たしてくれる男が現れたな。フッフフ。)
」と思っていた

その頃

西方十勇士の大将

石田三郎はというと

?????」どうでした?川神百代は。」

石田「結構強いな、噂通りに強い。ようやく、強い奴と戦った気がするよ。」と言った

風間ファミリーは川神学園に着き

自分達のクラスに入って行った

大和は複雑の気持ちになった

姉さんが三郎と対戦している時本当に笑顔だった

もしかすると

三郎という人に盗られてしまうかもしれない

でも

姉さんが幸せならそれでも良いかもしれないと複雑な思いだった

すると

斑「あの三郎という人間の事に気しているのか。」と窓から斑が言ってきた

自分の席は窓際で斑の姿が見える

大和「まあね。」

斑「もしかすると百代という女、三郎に盗られるかもな。」

大和「、、、、、、。」と大和は黙ってしまった

斑「傷付いてしまったのならすまない。だが、このままだと取られる可能性も否定できないぞ。」

大和「わかってる。でも、姉さんが幸せなら俺は良い。」

斑「本当にか？本当にお前にとって幸せか？」

大和「、、、、、、ああ、そうだ。」と言った

斑「そうか、分かった。私はこの学園に何もなければパトロールに行ってくる。」と言って去って行った

その頃

百代はというと

機嫌が良いのだ

理由は久々に強い奴と戦ったからである

百代「(ああ、早く戦いたいな、石田三郎と。それに結構かつこ良かったし。)」と思っていた

天神館に居る石田三郎は

三郎「ああ、早く百代と戦いてえな。それに結構美人だったし、もしかして俺は百代に恋をしているのか?、うん、まあ次会った時、この想いを伝えるかな。」と此方も思っていた

もう

この時点で大和に勝機が無くなったのかもしれない

大和も一応まだ百代に好意を持っているが

完全に百代と三郎は両者想っていた

2度目の対決 三郎と百代の想い そして新たな出会い？

あの戦いが終わってから早くも1ヶ月が経った

川神百代はやはり三郎との対決以外はつまらない状態になっていた

百代「はあ、つまらないな。おい、爺、もっと強い奴は居ないのか？」

鉄心「今は居ないな。」

百代「なんだ、つまらん。」と言って自分の部屋に入って行った

百代は寝室入り

ある男を思い浮かんでいた

その男の名は石田三郎

1ヶ月前

今まで対決してきた奴等は雑魚過ぎて毎日がつまらない状態だった

そして

私を満たしてくれる男とは日本

いや

世界中を探しても居ないだろうと思っていた

だが

石田三郎は違った

自分と互角以上に戦い

自分を満たしてくれる唯一の人だった

三郎となら

三郎なら自分を満たしてくれる

百代は三郎に恋心を持つようになった

百代「はあ、三郎と対戦したいな。」と言った

その頃

西方十勇士の石川三郎はというと

三郎「ふう、ようやく中間テストが終わったぜ」と言った

そう

石川三郎が行く天神館はテストが速いのだ

中間&期末も

三郎「さてと、百代に挑戦状でも送るとするかな。」と言って挑戦状を書き帰りに川神院のポストに入れた

10分後

一子がポストの中身を取りに行った

そして

百代宛の手紙を直ぐに本人に渡した

それを書いた本人は百代が会いたがっていた石田三郎だった

百代へ

急の事だが明日の土曜日

お前と勝負したい

そしてお前に勝ったらお前に話したい事がある

だから

明日の土曜日楽しみにしてくれ

西方十勇士の総大将 石田三郎よりと書いていた

百代「明日の土曜日か。よし！楽しみが増えたぞ。」と言った

その頃

大和はというと

ヤドカリ屋でヤドン&カリンの餌を買ってその帰りだった

斑「まったく、お前は良くあのヤドカリが好きだな。」

大和「まあね、昔から育ててるからね。」

斑「そうか。まあ、別に良いんだけどな。」と言った

すると

女性A「なにあの子、独り言が多いんだけど。」

女性B「こ、コラ！そんなこと言わないの！」と言った

そう

斑は妖怪で靈感が全くない人間には見えないのだ

大和は辛くなり走って去って行った

どのくらい走っただろうか自分は公園に居た

大和「はあ、はあ、はあ。」と息が荒くしながら言った

斑「大丈夫か？大和。」と心配をしながら言った

すると

?????「君、大丈夫かい？」とメガネを付けた男性が言った

大和「え、は、はい。」と言った

????? 「水飲むかい？」と言ってペットボトルを渡した

大和「すみません。」と言って手に取り水を飲んだ

暫く経って

大和はその人にお礼を言った

大和「すみません。」

????? 「いや、良いんだよ。」と言った時だった

その男性の隣に仮面を着けた者が急に現れた

大和「うわああ！」と驚きながら言った

すると

????? 「もしかして、柊が見えるのかい？」と言ってきた

大和「柊って、貴方の仲間ですか？」

????? 「うん、まあね。えっと、君の後ろに居る妖怪は君のかい？」と斑の事を言った

大和「え？ええ、そうです。って事は貴方も妖怪が見えるのですね？」

????? 「うん、まあね。」と色々と妖怪の話を行った

すると

????? 「話が弾んで自己紹介がまだだったね。僕の名前は、名取周一だよ。」

大和「名取周一って、あの俳優の? いや、こんな所で会うなんて凄い。あ、すいません、僕の名前は直江大和と言います。」と言った
すると

柊「主様、この直江大和という者、靈力が強過ぎるほどにあります。この者と一緒なら恐らくあの妖怪と対抗できます。」と言ってきた

だが

名取「こら、柊、大和君を危険な所に行かせたくない。」と言った

大和「あの、危険な場所って何ですか?」と言った

名取「実は、今から1年前になるね」と1年前の事件の事を話した

2度目の対決 三郎と百代の想い そして新たな出会い？

その事件は今から1年前になる

千葉県の ホテルで殺人事件が起きた

犯人は捕まったが殺し方が酷かった

殺された女性は29歳で眠っている所を襲われた

そして

その女性の名は怜奈という

怜奈の体を縛った後

刀を取り出し

両腕両足&胴体を切断したのだ

それで死んだと思われたがまだ生きていて

電話で助けを求めようとしたが首を跳ねられ亡くなった

そのホテル内は全体的にその女性の血が染まっていた為

ホテルを新しく改築した

だが

深夜の2時にその殺された女性の声が聞こえてくるのだ

女性「私の体を返せ〜！」と泊っている人をびびらせてしまった人が来なく無くなってしまった

そして

そのホテルは幽霊ホテルとなってしまうって廃墟になってしまった

それがその事件の内容だった

大和「そんな事件があったんですね。それで僕が手伝う事は恐らく成仏させる事ですね。」

名取「うん。一緒にやってみるかい？」

大和「はい、何処まで出来るか不安ですがやってみます。」

名取「では、君の家に行つて許可を取ろう。君の家はどこだい？」

大和「僕の家は島津寮という所です。」

名取「じゃあ、一緒に行こう。」と言つて行く前に綺麗な花束を用意して行つた

そして

島津寮に着き

大和と一緒に旅行しに行くと言つた

麗子「明日から旅行ですか？構いませんがどの位で帰って来るのですか？」

名取「2、3日位ですね。」

麗子「2、3日って学校は？」

名取「ご安心ください。僕の知り合いが学校を休むと言っておきましたので。」と言った

その知り合いは柊だった

電話で大和の母親と名乗り旅行に行くのでお休みしますと言った

そして

休みがとる事に成功した

麗子「まあ、それなら良いか。大和ちゃんの事よろしくお願いしますね。」

名取「はい、お任せください！じゃあ、大和君明日の朝迎えに来るからね。」と言って去って行った

大和は寝室に行き明日の準備をした

だが

何か忘れているような感じがあった

大和「何か忘れてるような気が、、あ！今日金曜集会があった！今から行っても遅いし、事情言うだけにしとくか。」と言って明日の準備を再開した

準備が終え

大和は直ぐに眠りに着いた

明日の為に

夜の9時半ぐらいだろうか

風間「お〜い！大和居るか？」と部屋に入って来た

だが

爆睡中だった

風間「もう寝てるのか。じゃあ、今日の金曜集会の事話をしとくぞ。明日の土曜日な川神院で百先輩と石田三郎との対決がある。もし、見れるのなら一緒に行こうぜ。」と言って去っていた

だが

大和は爆睡中なので聞いていなかった

翌日

朝早く島津寮に名取周一が現れた

名取「では、責任を持って連れて行きます。」

麗子「うん、行っておいで。」と言って二人を見送った

だが

大和は知らない

自分が戻って来た頃にはあの二人が付き合う事に

2度目の対決 三郎と百代の想い そして新たな出会い？

大和が家を去ってから1時間後

風間達が出て来て来た

すると

京「麗子さん、大和が居ないんだけど何処行ったの？」と言った

麗子「ああ、あの俳優の名取周一さんと一緒に旅行に行くと言って行ったよ。帰ってくるのは2、3日位だってさ。」と食事を食べながら言った

京「もう、早く行って貰えば私も行きたかったな。」と言って食事をとった

風間「京よ、今日は百先輩と三郎との対決があるんだからそれで機嫌直せ、な？」

京「うう〜、分かった。」としぶしぶとしながら言った

食事後

風間ファミリーは川神院に行った

すると

未でに百代が準備をして待っていた

百代「お！来てくれたのか。」

風間「ええ、まあ、百先輩が負ける訳がありませんが一応応援には来ました。」

百代「そうか、、、って舎弟はどうした？」と大和の事を言った

風間達は名取周一と共に旅行に行つたと話した

百代「そうか、旅行か。あいつにも見せたかったな、私と三郎の対決を。でも、約束なら仕方ないな。」とガツカリしながら言った

その時だった

巨大な気が現れた

その気の正体は

三郎「待たせたな、百代。」と西方十勇士を連れて現れた

百代「遅いぞ。何時まで私を待たせるつもりだったんだ？」

三郎「すまねえな。さあ、対決の準備は終わっているのか？」

百代「ああ、こっちは準備完了だ。何時でも良いぞ。」

三郎「分かった。」と言つて二人は構えた

鉄心「只今より、川神百代vs石田三郎の対決を始める。二人共準備は良いな？」

百代&三郎「おう！！！！」

鉄心「では、はじめ！！」と言つた瞬間二人は走つて攻撃をした

百代「はああああああ！！」

三郎「うおおおおおお！」と拳と刀のぶつかり合いが始まった
戦っている最中

三郎は百代に言った

三郎「百代。」

百代「なんだ？」

三郎「俺が勝ったら、俺の嫁になってくれないか？」と言ってきた

百代「三郎／＼／＼／＼。ほ、本気なのか！」

三郎「当たり前だ！お、俺はお前と会った時からお前の事が好きになっただんだ！」

百代「い、良いだろう／＼／＼！だが、私に勝つ事が出来ればの話だがな！」

三郎「本気で行くぜ！」と二人の戦いは激しくなっていた

そして

遂に決着が着いた

勝者は石田三郎だった

百代に強烈なボディブローを食らわせ気絶させた

気絶する直前

百代「三郎、み、見事だ。」と言った

鉄心「勝者、石田三郎。」と告げた

それから10分後

百代が意識を取り戻した

三郎「大丈夫か？」と笑顔で言った

百代「三郎、そうか、私が負けたのか。でも、結構楽しかったぞ。」

三郎「ああ、俺もだ。そういうば百代、約束覚えているか？」

百代「約束？」

三郎「俺が勝ったら俺の嫁になつてくれる約束だ。」

百代「ああ、覚えているぞ。ふふ、まさか本当に私に勝つとはな。

三郎、私はお前のお嫁さんになつてやろう。」

三郎「よし！じゃあ、俺の両親に紹介するから一緒に来い！」と百代を抱きあげて走りながら自分の家まで走って行った

風間「俺達の事すっかり忘れてねえか？」

一子「うん。でも、お姉様幸せそう。」と言った

三郎は百代をお姫様抱っこしながら30分後

実家に着く事が出来た

三郎「此处が俺の家だ。」

百代「ほう、結構広いな。」

三郎「まあな、さあ家に入るぞ。」と家に入って行った
すると

母「おかえり三郎、って誰なの？その女性。」

三郎「おう、この女性は川神百代といって俺の彼女だ。」

母「ええ〜！こんな美女があんたの彼女だって！はあ、勿体ない。」

三郎「って勿体ないってどう意味だよ！」とツッコミした

母「まあまあ、良いじゃない。川神百代さんて言いましたね。」

百代「は、はい。」

母「三郎の事よろしくね。」

百代「はい！」と言った

三郎は百代を寝室に入れた

三郎「此処が俺の寝室だ。」

百代「やっぱり広すぎないか？一人部屋にしては。」

三郎「そうか？まあ、良いじゃねえか。、百代。」

百代「ん？なんだ？」と言った瞬間三郎にキスされたのだ

百代「三郎／＼／＼／＼。」と目を閉じながら受け入れた

そして

二人は布団の上に移動し抱き合った

夜になり

百代が目を覚ました

今の二人は全裸の状態。百代の胸や首筋にはキスマークが付いていた

百代「三郎、お前と出会って嬉しかったぞ。お前は私を唯一満たしてくれる人になったんだ。」と言って眠っている三郎に口付けをして再び眠りに着いた

朝になり

三郎と百代は服を着て

家族の元に行った

昨日は母は出会った時から疲れていた為

百代との性行為を知らなかった

そして父親は昨日の夜遅くに帰ってきたため百代と三郎の関係は知らない

三郎は百代と付き合っている事を家族に言う為食卓に行った

食卓には父親が座っていた

父「おお！三郎、って君は誰だい？」と言った

百代「私は川神百代と言います。そして石田三郎さんの彼女です。」

と言った

父「ほほう、三郎の彼女か。くうくう羨ましいぜ。三郎にはもったいないな。」

三郎「って親父も母と同じ事かよ。」

父「まあ、三郎と上手くやってくれ。」

百代「は、はい！」と笑顔で言つて食事を一緒に食べた

二人は完全に両想いになった

それを全く知らない大和はというと

名取「ようやく着いたね、このホテルだよ。」と1日かけて例のホテルに着いた

大和「、、、霊が出そうですね。」

名取「まあね、さあ、行くよ。」

大和「は、はい！」と言つてホテルの中に入って行つた

大和は百代にまだ恋している状態である

だが

三郎と付き合っている事は知る事は無かつた

反魂の術

名取周一と共に幽霊ホテルに行った直江大和

そして

無事幽霊ホテルに着いた

名取「無事着く事が出来たね。大和君、準備は良いかい？」

大和「はい、いつでも。」

名取「じゃあ、入るよ。」と言って幽霊ホテルの内部に行った

中はガラ〜ンとなって静かだった

大和「なんか出そうですね。」

名取「まあね、えっと確か殺人現場は2階の405号室だよ。」

大和「はい、分かりました。」と言って歩いて行った

だが

霊が居る気配すらない

ピタ

ピタ

ピタ

自分達の足音だけが聞こえる

そして

405号室の前に着いた

だが

その部屋にも気配が全くない

大和「斑、怜奈さんの霊の気配が無いんだがどう意味だ？」と聞いてみた

斑「恐らく時間に関係があると思う。」

大和「時間？」

斑「草木も眠る丑満どきと言って真夜中の2時から4時くらいは霊が出ると言われている。だから、怜奈という女の霊は2時くらいだと思う。」

大和「2時か。どうします？名取さん。」

名取「仕方が無い、真夜中の2時まで待とう。その前に一応中には行って見よう。何かあるかも。」

大和「そうですね。」と言って405号室の中に入って行った

その部屋は空っぽだった

布団もキッチンと綺麗に整えていた

大和「綺麗な部屋ですね。」

名取「うん。」

大和「、、、やっぱり怜奈さんは居ないか。この部屋でバラバラにされちゃったんだよな。可哀想に。」と手を重ね拝んだ

名取「大和君、これからの事なんだけどこの近くの旅館で泊って真夜中になったら此処に戻って来るのはどうだろう。流石に此処で泊るのは気が引くし。」

大和「そうですね、近くの旅館で泊りましょう。」

名取「よし、決まりだ。さあ行こう。」と言って一度幽霊ホテルから去って行った

その旅館は幽霊ホテルから10分で着く事が出来た

女将「いらっしやいませ、お客様2名様ですね？」

名取「はい。」

女将「では、部屋まで案内します。」と言って部屋まで送って行った

部屋に着き

女将が言った

女将「では、何かありましたらこのインターホンで連絡を。、、、あの、お客様、もしかして名取周一さんですよね？」

名取「ええ、そうですが？」

女将「あ、あの、サインください！私、ファンなんです！」と色紙とペンを取り出した

名取「ああ、良いよ。」と言ってサインをした

女将「有難うございます！」と笑顔で言った

すると

大和「あの、女将さん。」

女将「はい？なんでしよう。」

大和「実は私達、真夜中の2時に少し寄りたい事があるのですが良いでしょうか？」

女将「真夜中の2時ですか？、あの、すみません理由を教えてくださいませんか？普通はその時間は全てのドアにロックしなければいけないのですが。」

大和「実は、私達幽霊ホテルに行かなければ行けないのです。」と言った

すると

女将が言った

女将「ゆ、ゆ、幽霊ホテルに行くのですか！行けません！絶対に行けません！」

大和「何故です！」

女将「あそこは、あそこは我が娘が惨殺された所なのです。」

大和「娘って怜奈さんのお母さんなんですか？」

女将「はい、そうです。もう、思い出したくは無いです。だからいけません！」と言った

すると

大和はとんでもない事を言った

大和「怜奈さんを反魂の術で蘇らせます！」と言った

女将「ほ、本当ですか！」

大和「ええ、但し怜奈さんが生き返る事を望んでいるか、そして骨

が全部見当たらなければ生き返らせませんが。更に生き返るの事が出来るのは1度つきりですが」

女将「お、願います。我が娘を蘇らせてください！」と言った

大和「わかりました。あと、女将さん貴方に準備して欲しい事があります。」

女将「はい、何でしょう。」

大和「蠟燭を準備してください。あと、骨壺も準備しておいてください。」

女将「はい、分かりました。」

大和「それだけで終わりです。あとは貴方が此処で私達の帰りを待つだけです。」

女将「はい、私の娘をよろしく願います。」と言って頭を下げた

そして

夕食を終え

遂に草木も眠る丑満どきの時間の2時になった

名取「さあ、時間だ。大和君、行こうか。」

大和「はい！行きましょう。」と旅館の入り口を開けようとした

その時

女将「お客様、骨壺を準備しました。」と女将が怜奈の骨を入れる骨壺を用意していた

大和「有難うございます、必ず怜奈さんを見つけ出して見せます。」

女将「はい、信じて待っております。」と言って大和達を見送った

名取達は幽霊ホテルに入って行った

すると

やはり草木も眠る丑満どきの時間なのか

霊の気配を感じた2人

名取「霊の気配が強いな。怜奈さんは恐らくあの部屋の中に居る。」
大和「ええ、行きましよう。」と言って怜奈さんが殺されたと思われる部屋の前に来た

そして

ゆっくりと405号室に入って行った

すると

?????「私の体を返せ〜!」と襲ってきた

大和は思わず拳骨をしてしまった

大和「あ、ごめん。いきなり襲ってきたから。って大丈夫?」と手を差し出した

?????「は、はい、大丈夫です。」と手を取った

大和「貴方が怜奈さんですね？」

怜奈「は、はい、そうです。」

大和「僕達は貴方を生き返らせる為に此处に来ました。」と全てを話した

怜奈「本当ですか！私生き返りたいです！えっと、私の骨は全てこの中にあります。」と箆笥の仲を指差した

名取は箆笥を開けた

すると

人骨が出て来た

怜奈「大和さん、名取さん、是非成功させてください。」

大和「はい、お任せください。」と言って骨を骨壺に入れて幽霊ホテルから去って行った

名取達は先程泊っていた旅館に戻って行った

そして

女将に骨を見せた

女将「ようやく娘が帰って来たのですね。」

大和「ええ、怜奈さんの骨も見つかり、生き返りたいと思う気持ちがありますので蘇らせる事が出来ます。では、蠟燭3つありますか？」

女将「はい！此处に。」と蠟燭を渡した

大和は怜奈の骨を床に傷付けないように置いた

そして

蠟燭を怜奈の骨辺りに置き呪文を言った

すると

今まで寒かった旅館から生温かい風が吹いてきた

そして

怜奈さんの体骨から肉が付き

臓器も完成し完全な怜奈さんが戻って来た

怜奈「う、うん、此処は？」とゆっくりと立ち上がったが何と生き返ったすぐなのか骨が見えてしまっている

大和「一応、生き返りましたが骨が見えてしまっていますね。この場合は骨が見えなくなるまで水を飲ませてください。」
女将「はい！有難うございます。」

大和「怜奈さん、貴方のお母さんだけ覚えてる？」と聞いてみた

怜奈「お母さん？は、はい！当然です。」

大和「そう、それは良かった。」

女将「本当にありがとうございます！1」と言ってお礼を言った

大和「いえいえ、当たり前的事了りただけです。では、僕達は寝ます。」と言って寢室に戻って行った

寢室に戻って行った名取達はというと

名取「大和君、反魂の術を行った事で有名になるんじゃないかな？」
大和「有名人ですか？あんなまし有名人にはなりたくはありませんが。」と言った

そして

翌日川神市へと帰ろうとした

その時

女将「お客様〜！」と女将が追ってきた

怜奈と共に

大和「女将さんと怜奈さんじゃないですか？どうしたのです？」
女将「あれから怜奈に水を与えて骨が見えなくなりました。」
大和「そうですか、それは良かったです。」
女将「本当に今まで有難うございました。ほら、怜奈も礼言って。」
と言った

怜奈「えっと、本当に生き返らせてくれてありがとうございます。」
とお礼を言った

大和「いいえ、どういたしまして。ああ、そうそう、僕の名前まだだったね。僕の名前は直江大和と言います。では、これで失礼いたします。」と言って去って行った

女将と怜奈はいつまでも名取達を手を振っていた

名取「大和君、本当にありがとう。君と一緒に仕事した事忘れないよ。」

大和「いいえ、此方こそ会えて嬉しかったですよ。」と握手した

名取「じゃあ、僕は次の仕事があるので此処で。」

大和「はい、あの、また会えますよね？」

名取「ええ、きっと。」と言って名取とお別れをした

すると

斑「大和、帰るとするか。」と白い獣が姿が現れた

大和「いや、待って、皆にお土産を買って行かないと。斑、確か今の季節は桃が買えるよな？」

斑「ああ。」

大和「一番おいしい桃がある店って知っているか？」

斑「まあ、知っているとも。さあ、私に乗れ」と言っ大和を乗せ去って行った

斑に乗ると靈感が無い者には自分の姿や斑の姿も見えない状態になる

そして

大和は桃を買い

京の好物

辛い物や皆が食べる事が出来る物を買って川神市へと戻って行った

だが

大和は川神市へと戻った瞬間

悪夢を見る事になるうとは思ってもよらなかった

砕かれた想い

大和は斑に乗り

川神市へと行った

そして

川神市に着いた時

最初に行ったのは川神院だった

大和「こんにちは、誰か居ませんか？」と言った

すると

鉄心「誰じゃ？」と鉄心が現れた

大和「お久しぶりですね、学長。」

鉄心「おお〜、直江か、久しぶりじゃな。」と言った

大和「えつと、お土産を持ってきました。皆さんで食べてください。」と土産を渡した

鉄心「ああ、有難うな直江。」と礼を言った

すると

大和「ところで姉さんは？」

鉄心「百代か？、えっと、友人の家に行っておる。もう少しで帰って来ると思うのだが。」
大和「そうですね、では俺は用事があるのでこれで。」と言って帰って行った

そして

大和が帰って行ってから10分後

百代「ただいま。」と百代が帰って来た

鉄心「百代か、おかえり。すぐに夕食じゃぞ、さあ、手を洗って来なさい。」

百代「ああ、分かった。」と手を洗いに行き夕食を食べに行った
今日の夕食はカレーだった

百代「いただきま〜す！」と言って皆で食べた

食べている最中の時

鉄心が大きな箱を取り出した

そして中身を開けた

すると

沢山の桃があった

百代「オオ〜！桃じゃないか！どうしたんだ？この桃。」

鉄心「百代が帰って来る10分前直江が千葉から戻って来たんじゃない。そのお土産だ。」

百代「そうか、戻って来たのか。」

鉄心「百代、直江に全てを話すのか？お主が三郎と付き合っている事を。」

百代「、、、ああ、全て話す。」

鉄心「そうか、分かった。じゃが、お主の事が好きだった直江君がどう思うかな？」と言って食事を終え寝室に戻って行った

百代は静かに桃を食べていた

その頃大和はというと

島津寮に行き皆にお土産を渡している所だった

そして

大和は旅行の疲れなのか

直ぐに寝室へと向かった

だが

京「あ、待って大和。百先輩の事知ってる？」

大和「え？姉さんの事？悪いけど疲れているんだ、明日にしてくれる？」と言って京の言葉を無視し寝室に行き眠りに着いた

クリス「どうだ？京。話せたか？」

京「ううん、疲れてて眠っちゃった。」

クリス「そうか。」と言って二人も眠りに着いた

その頃

川神院には百代の彼氏である石田三郎が来ていた

百代が呼んだのだ

何故かというと

夜

百代の寝室でお互い全裸になった百代と三郎

性行為した後

三郎は気にしている事を言った

三郎「どうしたんだ？百代。俺を呼び出して。」と百代を腕枕の状態で言った

百代「ああ、私達の関係を大和に話そうかなと思うんだ。」

三郎「大和って確かお前の舎弟だよな。もしかして、旅行から戻って来たのか？」

百代「ああ、そうだ。大和にはまだ話してないんだ。だから、明日風間ファミリーを緊急集会をやって話そうと思う。三郎も一緒に来てくれるか？」

三郎「ああ、分かった。」と言って二人はキスを交わした

翌朝

大和はいつも通り食事をとり

風間ファミリーと共に学校に行った

すると

百代から緊急集会があるから今日集まってくれと言われた

大和はなんだろうと思いつつ学校に行った

そして

下校時間になり

大和は秘密基地に行った

すると

既に石田三郎も居た

大和「（ん？三郎さんが何故此処に？まあ、良いか。）」
「と思いつつ自分の席に座った

風間ファミリーが全員揃った所で百代は全てを話した

百代「皆集まったな。今から話す事は偽りも無い嘘も無い話だ。え
っと、皆は知っていると思うが大和は旅行に行っていたから知らな

いので話そう。」と言って石田三郎に託した

三郎「えっと、川神百代の恋人の石田三郎と言います。そして学校を卒業し金の収入が安定したら結婚を約束しました。えっと、これからもよろしく！」と言った

大和は一瞬茫然としていたが

直ぐに冷静になった

大和「へえ、姉さんの婚約者か、おめでとう。」と笑顔で言った

だが

その笑顔には悲しみも含まれていた

皆はその悲しみまで読む事など出来ない

三郎「ああ、有難うな大和、絶対幸せにするぜ。」と大和に握手をした

そして

緊急集会は終わり風間ファミリーは自分達の家に戻って行った

大和は寝室に戻って行った

すると

斑「大和、どうした？涙を流して。」

大和「斑は知っていたんじゃないのか？姉さんが三郎さんと付き合っている事を。」

斑「、、ああ、知っていた。そして性行為もしている事も知っている。」

大和「じゃあ、何で黙っていた！付き合っている事を！」

斑「その話をしたらお前が戦闘に集中できないと思ったからだ。」

大和「そう、か。もういい、俺の想いは一瞬で砕かれた。」と斑に抱きつき大きな涙を流した

斑は慰める事しか出来なかった

もう大和は

人を愛する事は出来なくなる原因となってしまうた

樹海に謎の祠、そして恐ろしい神社？（前書き）

少し岳人ルートが入ります

樹海に謎の祠、そして恐ろしい神社？

百代と石田三郎が付き合ってから早くも1ヶ月が経った

二人に事は有名になっている

何せ

誰も手に入る事が出来なかった百代を三郎が手に入る事が出来たからである

師岡「いや、凄い人気者だよな2人とも。」

京「うん、私も大和とあんな風にラブラブになりたいな。」と言った

だが

大和は何も喋らない

百代と三郎が付き合う話をしてから

全く喋らないようになってしまったのだ

大和「、、、。。。」とずっと沈黙を続けている

その時

一子「大和、大丈夫？」と心配してきた

大和「ワン子か、ああ、大丈夫だけどどうした？」

一子「え？い、いや何も喋らないから具合でも悪いのかなと思っただけ。」

大和「そうか、心配してくれて有難うな。でも、大丈夫だ。」と言った

自分から話す事は少なくなっただけである

大和「そういえば、岳人はどうしたんだ？」と言った

師岡「えっと、確か小笠原さんと話をしていた所だった筈。」

大和「小笠原さんと？何を話しているんだろう。」

師岡「きつとキモ四天王と言った事を謝っているんですよ。」と言った

そう

岳人は小笠原さん達にキモ四天王と言われていたが

百先輩や黛由紀江によって無くなったのだ

そしておまけなのだが

大和はヤドカリの事を馬鹿にされたりしてその仕返しで授業で女性よりも男性の方が偉いと

言わせたのだ

大和「さてと、金曜集会に行くか。」と言って皆で秘密基地に行った

皆で騒いでいた時

岳人が笑顔で戻って来たのだ

大和「ああ、やっと来たか、、、ってどうした？そんな笑顔で来るなんて何があった？」と言った

岳人「オオ〜！よく言ってくれました直江君。実はな、明日小笠原さんと付き合う事になったんだぜ！どうだ！凄いだろ。」と自慢した

大和「そ、そうか。（はああ、どうせ授業の仕返しだろうな。）
」
と思っていた

大和「、でデート先は決まっているのか？」

岳人「ああ、決まって居るぜ。場所はな青木ヶ原だぜ。」と言った

大和「青木ヶ原って樹海だぞ！迷子とか大丈夫なのか？」

岳人「大丈夫だぜ！小笠原さんは良く行っているから大丈夫って言うている。」

大和「そうか。」と言った時だった

大和の後ろから斑が現れた

だが風間ファミリーには見えない

斑「大和、今すぐにそのデートを止めさせる！」と言った

大和「斑か？どうした。」

斑「早く止めるんだ。そのデートを。」

大和「お前が慌てるなんて珍しいな。何かあるのか？」と言った

すると

斑「良く聞いて。樹海の一番奥には恐ろしい物がある。」

大和「恐ろしい物？」

斑「実は、、、。」と全てを話した

大和「分かった！今すぐに止める。」と言った

大和と斑は心の中で声をかけられる

だから今までの声は全く聞こえない

岳人「それでさあ、」と言っている最中大和は岳人を止めた

大和「岳人、悪いがそのデート止めさせてもらう。」と言った

岳人「はあ？何でだよ！」

大和「お前、小笠原さんに騙されているんだよ。」

岳人「その話、ヨンパチにも言われたぜ。でも、チカリンは騙そう
なことはしないぜ。」

大和「お前、何も分かっていない樹海のもう一つの姿を。」

岳人「もう一つの姿？」

大和「全て話そう、樹海の本当の恐ろしさを。」と言って全てを暴
露した

樹海に謎の祠、そして恐ろしい神社？（前書き）

青木ヶ原とは完全に別の物になっています

樹海に謎の祠、そして恐ろしい神社？

大和「江戸時代になる。良いか、よく聞け。」と樹海の恐ろしさを言った

青木ヶ原は江戸時代の頃から存在している

昔は沢山の家が存在しており住んでいる人たちも居た

だが

江戸時代の頃恐ろしい生き物が居て人々を苦しめていた

その生物は竜

いわゆるドラゴンや狼であった

そのドラゴンの名は天空の神オシリス

太陽の神ラーの翼神竜

レッドアイズダークネスドラゴン

そして

狼の名はバトルウルフであった

人間達を食い殺したり焼き殺したりしていた

だが

沢山の犠牲者を出してどうにか祠に封印する事が出来た

だが恐ろしい物はそれだけではない

祠から100M位にある神社に山賊が現れ神社の中に居る人々を容赦なく殺されて

その神社は血の色でその寺が真っ赤になったという

大和「、、、これが全てだ。どうだ？これでも行く気になったか？」と言った

皆大和の発言に震えていた

岳人「、、、ほ、本当にあった話なのか？」

大和「当たり前だろ。」

岳人「で、でもよ、一番奥に行かなければ良いんだろ？」

大和「そうだけど、良いか？樹海は迷子になると方向が分からなくなっているの間に一番奥に行っている可能性もあるんだ。まあ、その前にはほとんどの人達が力尽きるがな。」

岳人「だ、だ、大丈夫だぜ。俺やチカリンはそんな間抜けはしない。俺はチカリンを信じている。」と声を震えながら言った

大和は溜め息をした

大和「お前がそこまで言うなら止めない、勝手にしろ。だが、迷子になってしまったら自己責任だからな。そして死が待っているぞ、

気を付けるんだな。」と言って大和は本を読んだ

斑「良いのか？止めなくて。」

大和「、、、一応、俺も後を追う。」

斑「そうか、なら大丈夫か。」

大和「ああ、そうだ。岳人に魔除けの文字でもしておくか。」

斑「そうした方が良いな。」と言った

大和「岳人、少しお前に良い事をしてやろう。」と筆を取り出した

岳人「なんだ？」

大和「上着を全て脱げ。」

岳人「は？まあ、良いが」と上着を脱いだ

大和は岳人の心臓の上に描いた

岳人「な、なんだこれは？」

大和「魔除けの文字だ。これで襲われても死にはしない。」

岳人「襲われてもって襲われねえよ。俺は強いんだぜ。」と言った

だが

大和「お前は何もわかっていない。岳人、お前靈感全く無いだろう。」

岳人「ああ、そうだけど。」

大和「いいか、靈感が全くない人間は妖怪の姿が見えない、そして攻撃なんて無効化される。」

岳人「つまり百先輩の攻撃もか？」

大和「靈感が無ければ姉さんの攻撃もあらゆる攻撃も無効化する。

つまり靈感が無い人間は妖怪には勝てない、無力だっただことだ。最

強なのは妖怪だ。」

岳人「でもよ、あそこは霊は出ないんだろう？」と言った

だが

大和「残念だが霊は出るぞ。先程も言ったがあそこは江戸時代ドラゴン達に殺された者達が沢山いる、更にあそこは自殺スポットにもなっている、だから必ず霊は出る。」と言った

岳人「そ、そうか。でも真夜中にならなければ出ないんだろ？」

大和「まあな、霊能力者である俺でも何も感じなかったからな。」

岳人「お前って霊能力者だったのか！」

大和「ああ、そうだ。だから俺の場合は霊が出ても攻撃を全て回避して一瞬で倒すがな。」と言った

大和「兎に角、行くなら真夜中になる前に樹海から出るんだ。そうしなければお前帰って来れないぞ。」

岳人「分かった、必ず出てやるぜ！」と自信満々の状態で言った

樹海に謎の祠、そして恐ろしい神社？

翌朝

岳人は小笠原さんとデートの為

朝早くに出掛けて行った

そのあと

岳人を大和は追って行った

そして

バスで青木ヶ原樹海に行った

小笠原「さあ、行こう。」

岳人「お、おう。」と言って小笠原と共に樹海へと入って行った

大和は斑の上から降りて岳人達の後を追った

斑「一応、万が一の為迷子になったら直ぐに私の上に乗れ。」

大和「ああ、分かった。」と言って斑と共に樹海へと入って行った

10分が経ち

岳人達はどんと奥に入って行った

斑「あの小笠原という女はこの場所本当に知っているのか？」

大和「岳人が言っているんだ、真実だろ。」
斑「どうも信じられないな、大和止めた方が言いのではないか？」
大和「うゝむ、でも岳人が此処で止めると怒るし、しばらく様子見にしよう。」と言って逸れないように行った

そして

夕方になり

いつの間にか岳人達を見失ってしまったのだ

大和「拙いな、見失った」

斑「早く見つけなければ夜になってしまう。」

大和「ああ、急ごう！」と走って奥まで走って行った

その頃

岳人達はどうと

岳人「チカリ〜ン、何処だ〜！チカリ〜ン！」と言っていた

そう

岳人も迷子になっていたのだ

だが

小笠原は既に外に居た

小笠原「やった〜！仕返し成功！」と言ってバスに乗り樹海から去って行った

そして

最悪の夜になってしまった

岳人「チカリ〜ン、何処だよ。うう、俺、大和の言う事ちゃんと聞けばよかった。」と溜め息をした

と

その時！！

ガサガサツガサガサ

岳人の近くで何かが動いた

岳人「だ、だ、誰だ！」と言った

すると

大和「やっと見つけたぜ。」と大和が言った

岳人「大和じゃねえか！良かった。」と笑顔で言った

大和「さあ、帰るぞ。斑、悪いが岳人を連れて川神市へと帰ろう。」と言った

だが

斑「大和、すまないがそれは出来ない。」と言ってきた

大和「は？何で？」

斑「先程から強力な結界がこの樹海を何者かが張っている。恐らく、夜になるとこの樹海は外に出られないように結界が張られるようだ。だから、朝になるまで樹海で泊るしかない。」と座りながら言った

大和「もし、朝になつても結界が消えなかつたら？」

斑「一生この場所から抜け出せない。」

大和「マジかよ。」と言った

岳人「大和？帰り道分かるんだろう？」と言ってきた

だが

大和「、、、悪いが今日は此処でお泊りだ。」

岳人「何で？」

大和「実は、、、。」と斑が言った事を岳人にも言った

岳人「仕方が無いか。じゃあ、泊ろう。」と言ってその場に座り込んだ

暫く経って

二人はお腹が空いていたので

大和が行く時に買っておいたおにぎりや飲み物を取った

大和「じゃあ、そろそろ寝るか。」

岳人「その前にちよつとトイレに行ってくるわ。」

大和「ああ、遠くに行くなよ（斑、一応岳人の後を追って）」

斑「（ああ、分かった）」と言って岳人の後を追った

すると

トイレから戻って来た時だった

岳人「や、や、やま、大和~~~~~!!」と悲鳴を言いながら戻って来た

大和「どうした？」

岳人「お、お前が言っていた例の祠が、祠がこの先にあるぞ。」と言った

大和「なに？本当か！」

岳人「ああ、こつちだ！」と言って大和を連れて行った

そして

連れて行かれた所は何もない草も木も無かった

そこにポツ〜ンと祠が建っていた

大和「あれが江戸時代の頃人々を苦しめていたドラゴンと狼が封印されている祠か。まさか、俺達樹海の一番奥に行っているとはな。」
と言って近寄った

祠の中を見てみた

祠の中には沢山の鎖だらけで覆っていた

大和「(斑、こいつ等じゃないのか？結界を張っているのは。)

斑「(いや、こいつ等が張っている気配が無い。)

大和「(じゃあ、誰なんだ？)」

斑「(恐らく、この近くにある血で染まった神社の亡霊共だ。)

大和「(斑の力で何とかできないか？)」

斑「(無理だな、殺された霊の数が多過ぎて対処が出来ない。)

大和「(そうか。)」と言った

岳人「どうした？大和。」

大和「え？あ、いや何でも無い。えつとな結界を張っている者はこの近くにある血で染まった神社の亡霊達だという事が分かった。」

岳人「マジかよ！」

大和「ああ。しかも、その数が多過ぎて対処できない。だから朝になるまで待つしかない。」と言って祠の近くで寝袋を準備して眠りに着いたのだった

樹海に謎の祠、そして恐ろしい神社？

岳人と大和が寝袋で寝てから1時間後

もう既に時刻は真夜中の1時であった

岳人「なあ？大和。」

大和「なんだ？」

岳人「今日中には帰れるのか？」

大和「さあな、帰れるかどうかはあの亡霊達が決める。」

岳人「ううう、俺初めてのデートがこんな風になっちゃうんですよ。」

大和「だが良い経験だろう？あんまし人をそんな簡単に信じない方が良い。さあ、とっとと寝ろ。」と言った

すると

岳人「なあ？結界を破壊する事が出来る者って居ないのか？」と言ってきた

大和「破壊する事が出来る者か？うん、居るのは居るな。」

岳人「誰だよ、それ。」

大和「それは祠の中に居るドラゴン達だよ。」と言った

岳人「なあ？封印解いて結界を破壊して貰ったらどうかな？」

大和「岳人、殺されたいのか？封印を解いたら俺達の命が危なくなる。それだけじゃない、世界までも危なくなるんだぞ。」

岳人「でも、どうしても結界が消えなかったらどうするんだよ？」

大和「そう言う時は、さあな。此处で死ぬしかないな。」

岳人「俺死にたくねえよ。」
大和「俺だつて死にたくは無い。だが、今は寝るしかない。」と言
つて二人は眠りに着いた

そして

草木も眠る丑満どきの時間である2時になった

大和達は爆睡していた

そのとき

祠からだろつか声が聞こえて来た

封印を解け

封印を解け

封印を解けと聞えて来た

大和は気にせず眠りに着いた

そして

翌日

今日は日曜日

樹海で遭難してから1日目になった

岳人「おはよう、大和。」

大和「ああ、おはよう。ほら、食事だ。昨日沢山買って置いたからだが、2、3日しか持たない。貴重な食事だ。さあ、食べるぞ。」
と言ってパンを食べた

すると

斑「（大和、やはり結界は消えていない。）」

大和「（そうか。あの亡霊達め、俺達を出られないようにするつもりだな。）」

斑「（恐らくな、、、でどうする気だ？）」

大和「（結界が消えるまで待とう、、、それでも結界は消えなかった場合は最悪の場合。）」

斑「（最悪の場合？）」

大和「（岳人の言うとおり封印を解こう。あの祠の封印を。）」

斑「（危険過ぎるぞ！殺されてしまう！）」

大和「（だが、彼等しか出来ない。だから最後の賭けとして封印を解く。でもそれは悪魔で最終手段としてだ。）」

斑「（お前がそこまで言うのなら分かった。）」と言った

岳人「大和、結界の方はどうなんだ？」と言ってきた

大和「ああ、消えていない。結界が消えるまで此処に泊るしかない。」

岳人「で、でもよ食事が尽きてしまうぜ！消えなければ。」

大和「わかっている！でも、待つしかない。俺達が待つ時間は3日だ。三日経っても結界が消えなかった場合は最終手段として祠の封印を解く。そして結界を破壊して貰う。」

岳人「で、でも暴れて世界が危ないんじゃない？」
大和「彼らに賭けるしかない。」といった

そして

一日で飲み物が尽き喉がカラカラであった

夜になり樹海は季節関係無しで気温がグーンと下がって寒くなるので早々と眠りに着く

が

やはり

草木も眠る丑満どきの時間である2時になると

祠から声が聞こえて来た

封印を解け

封印を解け〜と言っていた

大和は封印を解けば確かに出られる可能性が一気に高くなるが

世界が危なくなる可能性も高くなるので封印を解いても良いのか不安だった

そして

樹海から遭難してから2日後が経った

やはり結界は消えていなかった

岳人「今日は月曜日、学校の方はどうなんだろうな。皆、心配しているのかな？」

大和「さあな。」

岳人「はあ、女って怖いな。男の恋心をボロボロにして。」

大和「まあ、全ての女性じゃないぜ。良い女性だって居る。」

岳人「それは分かっているさ。でもさ、そう簡単に信じられないぜ。この事件が切っ掛けでさ。」と言って食事を食べた

その頃

川神学園はというと

大変な事になっていた

それは

2年F組の教室

師岡「お前えええ〜！岳人がどれ程お前とデートしたかったかわかっているのかよ！」と小河原さんにモロはブチキレ状態だった

原因は簡単である

岳人を樹海でたった一人置いて行き自分は家に帰ってしまったからである

小笠原「わ、私、岳人なら出られると思ったから。まさか、本当に出られなくなつたなんて分かんなかったのよ。」と涙を流しながら言った

師岡「貴様〜〜！樹海がどれ程危険かわかつているのかよ！あの樹海にはとんでもない物までも住んでいるんだぞ！ああ？大和から聞いた話だけど、。」と大和の話を言った

ドラゴンの話&殺人事件の事も

小笠原「そんな！私知らなかった。本当に知らなかったのよ！」と蹲りながら言った

師岡「知らなかっただと！いい加減にしろよ！そして、岳人を止めようとした大和も樹海に遭難してしまって、もう2日が経っているんだぞ！死んでしまつたらどう責任取るんだよ！」とビンタを食らわせた

と

その時

小島「止める師岡！」と小島先生が止めた

師岡「しかし！こいつのせいで岳人と大和が遭難しちゃつたんですよ！落ちつける筈がありません！先生こそ岳人達の居場所分かつたんですか？」

小島「いや、それはまだ不明だ。だが、必ず見つける。だから、落ちつくんだ。」

師岡「二人が死んでしまつたらどう責任取るつもりですか？」

小島「担任を辞任しよう。」と言った

師岡「わかりました。じゃあ、二人が死んだら責任を取って辞任をしてください！」と言って自分の席に座った

小島「さて、授業をしたい所なんだが、直江と岳人の情報を言おう。今、学長が樹海の方に行っているが結界が張っており中には入れない状態になっている。学長が何とか破壊しようとしているが壊せないようだ。何か特殊な結界のようだ。学長はこれ以上自分達も危なくなる可能性がある為、一度川神市に戻って来る。」と二人の情報を言った

師岡「じゃあ、どうする気ですか！岳人と大和の事。」

小島「二人が自力で脱出するしか方法が無い。師岡、二人を信じるしかない。」と言った

風間ファミリーは下校時間

緊急集会が行われた

一子「大和と岳人が樹海に入ってから二日目ね、爺ちゃんでも壊せない結界があるなんて。ねえ、お姉様、二人は必ず生きて帰って来るよね？」

百代「当たり前だろ！岳人と大和は必ず帰って来る。だから、私達は待ってるしかない。」と言った

色々として風間ファミリーは帰って行った

百代は自分の彼氏である三郎へと向かった

三郎「オウ、どうしたんだ？」

百代「ちよっと声が聞きたくてな。」と言って三郎に抱きついた

三郎は一瞬驚いたが百代を抱きしめた

二人は性行為した後

三郎は気になっている事を言った

三郎「今日の百代変だぜ、どうかしたのか？」

百代「実はな、」と全てを話した

三郎「大和と岳人が樹海で遭難！あそこは危険だぜ！何で行かせたんだよ！」

百代「小笠原さんの罫に引っ掛かって、樹海へと迷ってしまったんだ。」

三郎「良いか？百代、死ぬ可能性が非常に高いんだぜ！1カ月経っても帰って来なかったら諦めた方が良い。」

百代「そ、そんな！」

三郎「そう言う所なんだぜ、まあ、その前に帰ってくれば良いんだけどな。」と百代にキスをして眠りに着いた

百代「（本当に大丈夫だろうか。）」と思いながら三郎に抱きしめられながら眠りに着いた

樹海に謎の祠、そして恐ろしい神社？

樹海で遭難して3日が経った

飯はあつた筈なのに何処にも無かった

よく探してみると

地面に落ちてしまっていた

もう食べられない状態になってしまった

大和「(斑、結界の方はどうだ?)」

斑「(消えていない。)」

大和「(クソ！また此処で野宿かよ!)」と言って食事無しの状態が1週間も続いてしまった

大和と岳人は髪がぼさぼさで

腹は空き過ぎて今にも倒れそうで

髪も伸びていた

岳人「アアーーーー！限界だーーーー！大和！祠の封印を解こう。もう、俺は限界だ！」

大和「そ、そうだな。封印を解こう。(斑、解く方法を教えて)」
といった

斑「（封印を解く方法は霊力が強い大和しか解けない）」

大和「よし、俺が鎖を解くから岳人は下がれ。」と言って下がらせた

大和は祠を開けて

鎖に手をやった

大和「くそー！いい加減に鎖解けやがれー！」と言って本気で鎖を全て外した

すると

中から巨大な力が出て来た

そう

最強のドラゴン達の封印が解かれたのだ

大和「や、やったぞ！封印を解いた。」と言った

だが

岳人「おい、ドラゴンは何処に居るんだよ。」と言った

そう

ドラゴン達も靈感を持って居ない人間は見えないのだ

大和「俺達の目の前に居る。」と言って大和はドラゴン達の目の前に来た

大和「あ、あのさ、君達なら此処の結界を壊せるんじゃないかな？だから、此処の結界を壊して欲しいんだけど駄目？」と言った
すると

オシリス「結界を壊す事ですか？まあ、出来ませんが。」
大和「じゃあさ、結界を今すぐに結界を壊してくれる？」
オシリス「わかりました。」と言って口を開け攻撃をした
すると

パリ〜ン

結界が壊れた音がした

大和「やった！壊れたぞ！有難うな。あとさあ、俺の仲間になって欲しいんだけど駄目かな？」と味方になって欲しいと心願した

オシリス「う〜ん、そうですね。ちょっと待ってください。みなさんと相談してみます。」と言ってラーの翼神竜達と相談した

オシリス「どうします？あの封印を解いてくれたあの男性は結構霊力が強いですよ。私達は霊力がある人間によって攻撃力が上がるんですから仲間になりましょうよ、ね？」と言った

ラー「確かに彼は霊力が強い。それに、結構イケメンですし、良いでしょう、仲間になりましょう。」

レッドアイズ「私も賛成です。」

バトルウルフ「ああ、私も賛成だ。」と反対する者が居なかった

オシリス「では、仲間になると言っ来てますね。」と大和の元に来た

オシリス「良いでしょう、貴方の仲間になりましょう。但し、私達の食事は人間食は食べられません、私達の食事は霊力ですので貴方の力を吸収させて貰います。それが条件で仲間になりましょう。」と言った

大和「吸収って、食べるって事？」

オシリス「いいえ、食べるのではなく私達は人間モードになる事も出来ますのでその時キスをすれば霊力を吸収出来ますので。」

大和「わかった。じゃあ、これからも宜しくね。ああ、そうそう、僕の名前はまだだったね、僕の名前は直江大和、そしてあれが島津岳人だ。」と自己紹介をした

オシリス「わかりました、大和。これからも宜しくお願いします。」と言った

すると

破壊された筈の結界が再び再生したのだ

オシリス「結界が再生するなんて！」

大和「恐らく、血まみれの神社に居る亡霊共を倒さなければいけない。斑、一緒に行つて倒しに行こう。」

斑「ああ、了解した。」と言つてオシリス達と共に血塗れの神社に行つた

岳人は斑の上に居た

岳人「オオ〜！早い早い。」

大和「良いか？絶対に俺から手を離すなよ？離したら落っこちるか
らな。」と言つて神社の方に行つた

5分後

遂に血塗れの神社に着く事が出来た

すると

亡霊A「此処からは逃がさんぞ〜〜！」と沢山の亡霊達が居た

大和「亡霊共があんなに居るとは！岳人は何処かに隠れているんだ
！俺達が倒しに行くから。」

岳人「ああ、分かつたぜ。」と木の陰に隠れた

岳人は信じられない物を見た

大和の攻撃が全く見えない状態だが何者かの悲鳴は聞こえてくるのだ

悲鳴「ギヤアアア〜〜〜！」と言つ悲鳴があつた

だが

大和の方を見ると

少し笑っていたのだ

大和「亡霊共め、いい加減に成仏しろ〜！」と言って全ての亡霊達を斑達と共に倒した

そして

全滅した後

結界が消え神社もオシリス達の攻撃に耐え切れず崩壊をした

大和「ふうう、岳人、出て来て大丈夫だぞ。」と言って岳人を来させた

岳人「お、おう。しかし、本当にすげえな、お前の力つて。ほんの一瞬で終わっちゃうなんてよ。」

大和「大したことない。さあ、さっさと川神市へと帰るぞ。」と言って再び斑の上に二人は乗り川神市へと向かおうとした

すると

オシリス「マスター、私達の事なのですが。」

大和「どうした？」

オシリス「普段の状態は人間化の状態にしようと思いましたが、マスターはどう思いますか？」

大和「う〜ん、確かにオシリス達はでかいからな、うん、人間化の姿になってくれ。」

オシリス「わかりました。では、。。」と言って人間になった

その姿は絶世の美女達が現れた

大和「ほ、ほ、う、結構美人じゃないか？」
オシリス「あ、有難うございます。さあ、川神市へと戻りましょう」と言って空を飛んで行った

大和「へえ、人間化になっても飛べるんだな。」
オシリス「ええ、一応。」と言った時だった

グウウウ〜

大和と岳人のお腹が鳴った音がした

大和「そう言えば、食事まだだったな。斑、この辺に旅館無いか？」
斑「旅館なら、あ！あそこに丁度あるぞ。」

大和「よし、今日はあそこで泊るぞ。」と言ってその旅館に行った

宿主「、、、いらっしやいませ、、、はあ。」と何故か元気が無い状態で言った

大和「あいて居る部屋はありますか？」

宿主「はい、あります。、お客様6名様ですね？」

大和「はい、そうです。」

宿主「此方へどうぞ。」と部屋を案内した

宿主「では、この部屋を使ってください。食事は7時半となっております」と言って去って行った

外の眺めを見ていた時だった

オシリス「マスター、この旅館の宿主何か元気がありませんね。」

大和「そうだな。きつと不況でお客さんが来ないのでこの旅館の部屋の狭さがお客さんを来させないようにしている。」

ラー「何か方法はありませんか？」

大和「方法か？うーん、難しいな。」と険しい状態で言った

その時

岳人「なあ、温泉に行かないか？俺達、一週間も風呂入って居ないんだぜ。」と言った

大和「そうだな、風呂に入るか。オシリス達はどうする？」

オシリス「え？ま、ま、マスターと一緒に温泉ですか／＼／＼！温泉の中であんな事やこんなことまで、イヤンイヤン、私恥ずかしいです。」と顔を真っ赤にしている

オシリスだけではない

ラー達も顔を真っ赤にしている

大和「、、、、此処は女風呂と男性風呂ちゃんと分かれている。」と
いった

オシリス「なんだ、そうなんですか。ガツカリ。」とかなりショックしてしまっただのか溜め息をした

大和「し、仕方がない。今日だけは温泉と一緒に入るか？」と言ってきた

オシリス「は、はい！是非！」

ラー「私も！」

バトルウルフ「私も一緒に入りたい！」

レッドアイズ「うう、マスター私も！」と言って大和に抱きついた

大和「はいはい、じゃあ行くぞ。」と言って岳人と共に温泉の方に向かった

温泉の広さは広くもなく狭くもなく

丁度良い広さであった

大和達は体を洗ってから風呂に入った

大和「はあ、生き返るな。ってオシリス、ラー、レッドアイズ、バトルウルフ、全裸で抱きつくな！」と言った

そう

オシリス達は全裸の状態で大和の体に抱きついている

オシリス「別に良いじゃないですか、マスターだって本心は嬉しいくせに。」

ラー「そうです。それに結構良い体していますね。」

レッドアイズ「うん！素敵です！」

バトルウルフ「やっぱり鍛えている人は素晴らしいですね。」と頬擦りしながら言った

大和「まあ、嫌じゃないから良いか。、、そういえばもうすぐ7時半になるな。そろそろ、部屋に戻るか。」と言って風呂から上がり部屋に戻って行った

戻る最中の時だった

岳人「この辺りには霊は居ないのか？」と聞いてきた

大和「ああ、それは居ない。だから、今日はゆっくりと寝られるぞ。

「
岳人「それを聞いてほっとした。」と言って部屋に戻ると既に宿主が待っていた

宿主「お待たせしました、食事の準備が出来ました。では、どうぞ。」と言って食事を出した

大和と岳人達は食べた

味はとても美味しかった

大和「うん、美味しいね。」

岳人「ああ、そうだな。」と褒めていた

宿主「有難うございます。では、。」と言って宿主は去って行った

その時だった

オシリス「あのく、マスターく、私達も食事をしなければいけないのですが。」

大和「ああ、そうだったね。あれ？食事はちゃんとあるじゃん。」
オシリス「先程も言いましたが、私達は人間食は口に合わないのです。ですから食事の食事はマスターの妖力を吸収する事なのです。ですから、キスをさせてください。」と言ってきた

大和「仕方が無い、ほら良いぞ。」と目を閉じた

オシリス「では、お言葉に甘えて、失礼いたします。」と言ってキスを交わした

そのキスは結構な濃厚だった

1分半だろうか

口を離した

オシリス「御馳走様でした、マスター」と満足したように大和に抱きついた

他のドラゴン達もオシリスと共に大和にキスをして大和にべったりだった

オシリスとラーの翼神竜達の擬人化モード紹介

オシリスの天空竜擬人化紹介

フェイトテスタロッサハラオウン

年齢 19歳

3サイズ B98/W57/H88

好きな物 料理 直江大和

嫌いな物 我が愛する大和を傷付ける者

武器 バルディッシュガンパー

技

フォトンランサー

プラズマランサー

プラズマバレット

プラズマスマッシャー

トライデントスマッシャー

フォトンランサーファランクスシフト

ハーケンスラッシュ

ハーケンセイバー

アークセイバー

ジェットガンバー

サンダーアーム

ソニックブーム
ブリッツアクション
プラズマサンバー
プラズマザンバーブレイカー
サンダースマッシュャー
サンダーブレイド
フォトンランサーマルチショット
フォトンランサージェノサイドシフト
サイズスラッシュ
スプライトザンバー
サンダーレイジ
サンダーフォール
ライオットザンバーツインブレード
ライオットザンバーブレイカー

ドラゴンver

オシリスの天空竜の攻撃力は大和の霊力をどれだけ吸収した事で決まる

最大の攻撃力は である（勿論、リミッターする事が出来るがそれでも東京ドーム10個分が消滅するほどである）

技 サンダーフォース

ラーの翼神竜

性別 女性

年齢 19歳

3サイズ B104/W55/H87

髪 金髪の女性で腰以上にもある髪をしている

髪型 ストレート

顔 オシリスと一緒に絶世の美女である

身長 174cm

武器 拳

技

ゴッドフェニックス（人間モードでも出来る。威力はドラゴンの時より低下するが防御不能の技でこれを食らった者は一瞬で倒れてしまふのだ。）

レッドアイズダークネスドラゴン

性別 女性

年齢 18歳

身長 172cm

3サイズ B102/W54/H88

髪 黒い長髪

髪型 ポニーテール

顔 絶世の美女

武器 ダークネスソード（この武器は名の通り闇属性の武器で光属性のモンスターすら一撃で倒してしまうというありえない能力を持っている）

バトルウルフ擬人化

アルフ

性別 女性

3サイズ B96 / W57 / H87

好きな者 直江大和

技

バリアブレイク

フォトンランサー・マルチショット

（フォトンスフィアを生成、数秒後に光の槍を放つ。）

ソニックタックル

(敵に体当たりを入れる。)

ムーンアサルト

(その場で宙返り蹴り。)

ファンゲスロー

(投げ技。噛み付いて放り投げる。)

スピードだけならバトルウルフがトップクラス

旅館を救え

岳人と大和が旅館で泊って眠る時間になった

すると

斑達が居ない事に気付いた

大和「ん？斑？何処に行つたんだ？」と探そうとしたが明日は川神市に帰る日なので早めに寝ようと思った時だった

斑「大和、起きているか？」とオシリス達と共に現れた

大和「ああ、起きているぞ。何処に行つていたんだ？」

斑「すまない。だが、ようやく分かったぞ。この旅館の宿主が元気が無い事を。」

大和「不況だからじゃないのか？」

斑「それもある。が、最大の原因は場所が原因だ。」

大和「場所が原因だと？何故駄目なんだ？」と言った

斑「この旅館の隣が樹海だろう？皆、樹海で自殺した人の霊がやって来てお客さんを怖がらせてしまっている。この問題を解決する方法はただ一つ、此処から早く違う所へと引越した方が良いと思う」と大和の隣でベッタリとしながら斑は言った

大和「だったら、早く引越すれば良いんじゃないのか？あ、もしかして引越すお金が無いとか？」と言った

斑「そうだ。引っ越ししようともお金が無く引っ越しが出来ない。」
大和「そうか。ならば俺の力でお金を出すか。、、斑、どの位のお金があれば引っ越し出来るんだ？」と言った

斑「この旅館の宿主が言っただけだが、働いている人の給料も全然出る事が出来ない状態&引っ越しする金額もあるから約9千兆円あれば良いと思う。一人1兆円ずつの給料が払える事が出来る。」

大和「よし！9千兆円だな。」と言って大和は財布を取り出し1000円を取り出した

大和はその1000円を手で隠した

すると

僅か1分で9千兆円を出す事が出来た

大和「フウ、お金を出す事が出来るけど、あんまし使うと不老不死になっちゃうんだよな。まあ、仕方が無いか。オシリス、ラー、レツドアイズ、ウルフ、斑、悪いけどダンスの中にお金入れるの手伝って。」と言ってオシリス達にお願いを言って一緒に9千兆円を入れた

手紙と共に

大和「さてと、さっさと寝るか。」と言って斑達がべったりの状態
で眠りに着いた

翌朝

岳人と共に川神市へと帰る時だった

宿主「この旅館に来ていただき有難うございました。またのおこしをお待ちしております。」と言った

その時だった

大和「そうだ。僕達が居た部屋にあるタンスの中を開けてください。貴方方にプレゼントいたします。」と言って去って行った

宿主「は？タンスの中？」と言って宿主はタンスの中を開けた
すると

札束の山で宿主を覆い隠されてしまった

宿主「これは、札束！あのお客様ですか！あ、何かありますね。」
と手紙をみた

宿主へ

この札束は給料&引越しに使ってください

そして

この場所から早く違う所へと引越しをして新しい場所に行ってください

大和より

と書いていた

宿主「知っていたのか。給料が払えなかった事に、よし！皆、集まってくれ！」と言って従業員を呼び出した

宿主「皆、よく頑張ってくれた。皆に給料をあげよう。」と言って一人1億円の給料をあげた

従業員A「こ、こんなにですか！しかも、このお金何処で手に入れたんですか！」と従業員が信じられないような顔で言った

宿主「昨日、この旅館で泊った直江大和君という男性がくれたんだ。給料&引越し用に。だから、今日、この場所を離れ違う所へと引越しを行う。皆、手伝ってくれ！」と言った

すると

従業員9人が「おおおお〜」と言った

その頃

直江大和達はというと

斑の上に乗りながら川神市へと向かっている所である

そして

1週間ぶりの川神市に帰る事が出来た

岳人「やっと着く事が出来たな。」
大和「ああ、そうだな。、、まったく岳人、これに懲りて女性をそんなに信じるんじゃないぞ。」
岳人「判っている。さあ、島津寮に帰ろうぜ。」と二人は島津寮へと帰って行った

島津寮に戻って来たぜ

大和&岳人「ただいま〜」と二人は島津寮に着くなり言った
すると

麗子「大和ちゃん！岳人！何処に行ってたんだい！心配したじゃないの！」と麗子が大和と岳人を抱きしめながら言った

岳人「か、母ちゃん、苦しいって！」

大和「れ、麗子さん！く、苦しいです！」と気絶寸前の状態で言った

麗子「ああ、すまないね。と、何処に行ってたのか説明して貰おうか？」と二人を離して言った

大和「実は、。」と樹海に行っていた事を言った

麗子「全く、樹海に行ってたなんて。しかも、生きて帰って来るなんて奇跡だよ。それより大和ちゃん、髪伸びたね。まるで別人のようになってるよ。」と言った

そう

今の大和は髪&髪型が変わっているのだ

今の直江大和の姿はノクティス・ルシス・チエラムの姿である

大和「別人ではない、正真正銘、直江大和だ。それよりもキャップ達は？」と言った

麗子「ああ、学校に行っているよ。もう少しで帰って来ると思う。」
大和「そうか。あ、そうだ。麗子さん、お土産です。皆さんで食べ
てください。」と帰りに買ってきたお土産を渡した

麗子「ああ、有難うね、大和ちゃん。」

大和「礼など及びまない。」と言って大和は寝室へと向かった

それから10分後

風間「ただいま」とキャップ達が帰って来た

麗子「おかえり。ああ、そうそう。直江ちゃん達が帰って来ている
よ。」と言った

すると

京が我先に大和の部屋に行った

そして

京「大和、おかえり〜！」と抱きついてきた

大和「京か、元気になっていたか？」

京「うん、元気だよ？」と京は大和を見た

すると

まるで別人だったので一瞬驚いたが直ぐに大和だと判った

声で

大和「何か変わった事は無いのか？俺達が樹海に行っていた時。」

京「うん、ないね。」

大和「そうか、それは良かった。」と言った

その時

麗子「大和ちゃん、ご飯が出来たよ。」と麗子がやって来たので夕飯に行く事にした

席に座ると

風間達は大和をジロジロとみていた

本当に大和なのか疑っていた

大和「クリス、どうした？俺の顔を見て。」と言った

クリス「い、いや、本当に大和なのかな？って見ているだけ。」

大和「そうか。京なり麗子さんなりよく言われるな。本当に大和なのかって。だけど、真正銘直江大和だ。」と言って食事を食べていた

食事を終え

テレビを見ていた

すると

アナウンサー「次のニュースです。千葉県、ホテルで殺された
筈の麗子さん（29）が直江大和君という男性によって蘇ったとい
う超現象が起きました。」とニュースアナウンサーが言った

風間「死んだ人間を生き帰らせるって凄い事するな。、大和は。」
と大和に言ったが

大和「別に、彼女が生き返りたいと願っただけだ。」と言って疲れ
が来ていたのかさつさと寝室に入って行った

寝室に入って行った大和は

布団を敷き横になった

すると

斑「もう、寝るのか。」

大和「ああ、疲れているからな。それに明日は学校だからな。」

斑「そうか。それよりお前は名取周一が言った通り有名人になるな。
反魂の術の話が出回った事で。」

大和「ああ、そうだな。だが、それでも良い。孤独よりましだ。」
と言って眠りに着くのであった

人魚話？

翌朝

大和はいつも通り風間ファミリーと共に川神学園に行った

そして

百代「おはよう。」

一子「皆、おはよう。」と川神姉妹が声をかけて来た

百代「おお〜！岳人、無事戻って来たか？って舎弟の大和は何処に行ったんだ？」

岳人「大和なら居るじゃないですか。俺の隣に。」と言った

百代は隣を見た

すると

イケメンの男性が居た

百代「ほ、ほ、本当に大和なのか？」と言った

大和「ああ、そうだ。姉さんも、麗子さん達と一緒にだな。大和じゃないみたいって思っているんだな。だが、正真正銘俺は直江大和だ。」と言った

百代「そ、そうか。お前が無事で何よりだ。」と抱きしめようとしたが後ろ向き状態で大和は回避した

大和「モロ、小笠原さんはどうなったんだ？岳人を騙して、もう少しで樹海に遭難させたんだ。その責任は完全に小笠原さんにある。」
と言った

師岡「小笠原さんは涙を流していたよ。自分のせいで岳人と大和が遭難しちゃったってね。」

大和「そうか。岳人、どう思う？小笠原さんを許すか？許さないか？」と言った

岳人「許すよ。憎んでも意味ないからな。」

大和「そうか。じゃあ、この話は終わりだ。さあ、学校に行くぞ。」
と言って登校しようとした

すると

師岡「でも、どうやって樹海から出る事が出来たの？」と師岡が言った

大和「気になるか？モロ。」

師岡「そりゃあね。」

大和「実はね、、、。」と祠&神社の事を話した

師岡「封印を解いちゃったの！で、でも平気なの？」と言った

大和「安心しろ、モロ。彼女達は人を殺さない事と暴れない事を条件で仲間にした。だから、封印を解いても大丈夫だ。」

師岡「そ、そうなんだ。それは良かった。」と言って学校に登校した

大和は教室に入ると

小笠原さんが来た

小笠原「本当に二人には悪い事をしました。本当に、ごめんなさい！」と涙を流しながら謝った

岳人「大丈夫だ。チカリン、俺は気にしていない。」

小笠原「でも！」

岳人「気にしていないから大丈夫だ。さあ、今日も一日頑張ろうぜ！」と席に座った

そして

教室に小島先生が来た

小島「授業する前に大和と岳人、良く無事で帰って来た。先生は心から嬉しいぞ。」と言った

岳人「有難うございます。」

大和「有難う。」と言った

小島「そして、大和。お前、千葉県の ホテルで殺された筈の怜奈さんを生き返らせるなんて凄いな。驚いたぞ。」と言ったが

やはり

大和「キャップもそう言われましたが当然な事をしたまでだ。彼女

が生き返りたいと願ったから。」と冷静な言葉で言った

小島「そうか、それなら良い。では、授業を始める。」と授業を開始した

小島「今日は人魚のお話をしよう。人魚と人間は昔は仲が良く恋心を持っていた。だが、人魚の血は不老不死になれる事を知った人間は人魚を殺し、自分達は不老不死になろうとした。だが、人魚は最後の力を振り絞り人間達が入ってこれない洞窟に入って死んでしまい、生き残った人魚は2度と人間を好きなる事は無いと思い人間の前から永遠と会わなくなった」という伝説が 県で言われている。」と言った

すると

福本「伝説って、今は見た人は居ないんですか？」と福本が言った

小島「ああ、そうだ。だが、 県の 旅館の女将さんは会った事があると言われている」

福本「誰でも人魚を見る事が出来るのですか？」と言った時だった

大和「無理だな。」と大和が言った

小島「大和、どうして無理なんだ？」

大和「人魚は誰でも見えて言う事ではない。人魚が見える者は霊能力者しか見えない。恐らくその女将さんは霊能力者だから見えたんだ。霊力が全く無い人間は人魚は見えない。」と言った

福本「そうか、ちょっと残念だな。」と言って授業は終わった

授業が終わり福本は岳人の所に行った

福本「なあ？岳人。」

岳人「何だ？ヨンパチ。」

福本「今日は7月14日で明日修行式をやった後夏休みになる。そうしたらさ、人魚が出たと言った場所に行かないか？」と言った

岳人「あのなあ、靈感が持っていないと見えないと大和が言っていただろう。」

福本「そこをさ、大和に頼んで俺達でも見えるようにして貰うんだよ。」

岳人「まあ、時間があれば大和に言うておくよ。」と言つて次の授業の準備をした

人魚話？

そして下校時間になり

大和は金曜集会がある為秘密基地に向かった

だが誰も居なかった

大和が一番のりだった

大和「俺だけか。さてと、漫画でも見るかな。」と言って漫画を見ていた

すると

斑「大和、今日はお前が一番早く来るとはな初めてだな。」と斑やおシリス達が言った

大和「斑、おシリス、ラー、レッドアイズ、バトルウルフか、まあな。」

おシリス「今日は何か良い事でもありましたか？」と言った

大和「おシリス、良い事って何だ？」

おシリス「何かいつもより笑顔ですし。」

大和「そうかもな。実はな、 県の 旅館に人魚が現れたって言う情報があるんだ。お前達は知っているか？」と言った

すると

斑「知っているぞ。あそこは元々人魚の住処だったが人間達によって奪われたんだ。」

大和「そうか。、、で、今は人魚は全滅しているのか？」

斑「いや、全滅してはいないが不老不死目当てで人魚を殺しまくったからかなりの数が居なくなつた。えっと、今生きているのは1匹だけだ。」

大和「そうか。やはり、人間が憎いのか？今でも。」

斑「さあな、それはわからない。」と言つた

その時だつた

風間ファミリーが全員来たのだ

風間「オオ〜！お前が一番に来るとはな、珍しいな。」と斑が言つた事を言つた

大和「まあな。」と答えた

すると

岳人「なあ？大和。」

大和「何だ？」

岳人「明日暇か？」

大和「、、暇かつてまあな。」

岳人「じゃあさ、人魚が出たと言われた場所に行かないか？」と言つた

大和「別に良いぞ。だがな、さつきも言つたが人魚の姿は見えないぞ。此処に居る全員は霊感が全く無いからな。例え現れても見えない。それでも良いのか？」と言つた

すると

岳人「お前の力で人魚の姿を見えるように出来ないのか？」と問い詰めた

大和「出来なくは無。だが、見えるのはたったの2日だけだ。更に、2日経ったら2度と見えない。それでも良いのか？」

岳人「ああ、良いぜ。」

大和「分かった。、、で行きたい者は誰なんだ？」

岳人「ヨンパチと、どうだ？キャップ達も行かないか？」と言った
だが

全員NOだった

大和「分かった。、、明日その 県の 旅館に着いたら見えるようにする。だが、何が目的だ？」

岳人「そりゃあ、勿論。。」と何かを言おうとしたが

大和「人魚に好かれないと思っでは居ないよな？まさかな。人魚達は人間達によつて殺されてかなりの数を減らされたんだ。人魚は人間嫌いだからお前が好きになつても無駄だぞ。」と言った

岳人「、、好きになつちゃいけないのか？」

大和「好きになるなどは言わない。だが相手は首を撥ねない限り不老不死の人魚、人間は不老不死ではない、どんな人間でも歳をとつてババアになつたりジジイになつて最後は死ぬのが人間。たとえ結ばれても人間の方が早く死ぬんだよ。、、人間も不老不死になれれば話は変わるがな。」と言った

岳人「人間も不老不死になれるのか？」と言ってきた

大和「一応な。だが、それは一生孤独だぞ。愛する人が歳をとって死んでも自分は永遠に生きてしまふ。、、そうなりたいか、岳人？」と言った

岳人「、なりたくは無いな。でも、なれる人ってどんな人なんだ？」

大和「そうだな。不老不死になれるのは霊能力者だけだ。」

岳人「霊能力者だけって何故だ？」

大和「答えなど簡単だ。霊感が全く無い人間が生きた所で何になる？妖怪達は自分の存在を見つけようと必死で生きているのにそれを人間達によって自分達の住処を奪われていく。霊感が無い人間と違って霊能力者は妖怪の姿が見え、居場所を壊したり、奪っていく事は絶対にしない。だから、不老不死になれるのは霊能力者だけだ。」と少し冷酷な事を言った

岳人「今、この世界にいる霊能力者ってどの位なんだ？」と言った

大和「え？うーん、分からないな。そうだ！斑に聞いてみるからちよっと待ってる。」と言って窓を開けた

大和「斑、居るか？」と言った

すると

斑が現れた

斑「どうした？」

大和「この世界にいる霊能力者ってどの位居るんだ？」

斑「そうだな、世界中って日本だけだと僅か30人しか居ない。外国には存在しない。」

大和「そうか、有難う。」と言った

大和「岳人、日本に居る霊能力者は俺と俳優の名取周一さんを入れて僅か30人しか居ない。外国には居ない。」と言った

岳人「不老不死ってどうやったらなれるんだ？」

大和「人それぞれだぞ。お金を出す代わりに不老不死になってしまつとか、死んだ人間を蘇らせたり妖怪の姿が見える者は20代になつた場合に不老不死になる。」

岳人「人を蘇らせるって大和は確かやつたよな？って事は。」

大和「ああ、既に俺は不老不死だ。死ぬ事もないし歳を取る事も無く永遠にこの姿だ。」

岳人「、、、寂しくないのか？」と問い詰めた

大和「大丈夫だ。俺には斑達が居る。だから、寂しくは無い。、、それより明日、行くんだろ？その旅館に。」

岳人「え？あ、ああ。」

大和「だったら、明日は早く帰って寝ろ。明日は斑達も連れて行く。何が起きるか分からないからな。」

岳人「お、おう。」と言つて金曜集会を終えた

人魚話？

翌朝

大和は早起きをした

岳人「おはよう、大和。」

大和「ああ、おはよう。」と言った

岳人「さてと、ヨンパチが駅で待っていると知っているから早く行くぞ。」

大和「ああ。」と言って駅に向かった

駅に着くと

ヨンパチが待っていた

ヨンパチ「オオ、やっと来たか、遅いぞ。」と手を振りながら言った

そして

ヨンパチ達が電車に乗った

行き先場所は人魚が出たといわれた 旅館である

電車の窓からは斑達が追っていた

オシリス「斑、何も起きなければ良いですね。」

斑「そうだな。」と言った

暫く経ってようやくその人魚が出た場所に来た

電車から降りて大和達はその旅館に行った

旅館の近くには綺麗な湖があった

大和「綺麗な湖だな。」と言って歩いてきたときだった

湖に大きな人影が1体現れた

大和「ん？誰か泳いでいるぞ。」と言ってその人影を見た

すると

顔を出した

岳人「何か居るのか？」

大和「ほら、あそこに、、、。」と言ったときだった

何か人間ではないと分かった

岳人「どうしたんだ？」

大和「良いからとつと旅館に行くぞ。」と言って去って行った

そして

その旅館に着き

直ぐに部屋に入った

岳人「さてと、大和、俺達も妖怪が見れるようにしてくれ。」と言った

大和「全く、良いだろう。ただし二日だけだぞ。」と言って岳人とヨンパチの手を握り気を送った

すると

斑達の姿が見えるようになった

ヨンパチ「うおおお！何だ、この獣は？」と斑に言った

すると

斑「な！わ、私は獣ではなく最上級の妖怪だ！」と言った

大和「さてと、食事の時間だからとつとと行くぞ。」と言って食事を食べに行った

食事後

大和は一人で庭にある池に行った

大和「はあ。」と溜め息をしたときだった

斑「どうした？溜め息などして」と斑が言った

大和「いや、さっき見た妖怪は人魚だったのかなってな。」

斑「恐らくそうだろう。お前が友人帳を持っている事が知ってて会いに来たんだろう。」と言ったときだった

池に鮒が現れた

大和「あ！斑、鮒が居るぞ。」と言った

すると

鮒が瞬きをしたのだ

普通魚は瞬きをしないのに

大和「うわああああ！魚が瞬きをした！」

斑「離れる大和！ 脛のある魚は妖の化身と言われている、食われるぞおお！」と言った

言った後

その魚は何処かへと姿を消した

大和「何だったんだ？」

斑「さあな。もしかすると人魚が化けた姿かもな。」と言って寢室へと向かっていった

そして

食事も終わっているので寝ようとした

そのときだった

外から

”友人帳を置いていけ”という言葉が来た

大和「やはり来たな。」と言ったとき

その妖怪が扉を開け大和の首を絞めながら

外に来させた

妖怪「さあ、友人帳を渡せ！」と首絞めながら言った

だが

大和は全然苦しむ様子が無い

当たり前だ

大和は不老不死だからである

妖怪「（な、何故苦しむような素振りしないんだ？）」「と人魚は首を絞めたら思った

大和「どうした？殺すのではないのか？」と大和は言った

妖怪「つく！な、何故だ？何故お前は苦しまないんだ？」と言ったときだった

岳人「オラ！」と岳人とヨンパチが体当たりして大和を救った

妖怪「つく！お、おのれ人間！か、必ず友人帳を渡すまで何処までも追いかけてやる！」と言って去って行った

岳人「大丈夫か？」

大和「ああ、大丈夫だ。」と言って部屋に戻っていった

部屋に戻ると

岳人は気になる事を言った

岳人「なあ、友人帳でなんだ？」と言ったと言ったときだった

斑「お前には関係の無い品物だ。大体知ったところでお前には使うことなど出来ない。」と斑が出て言った

岳人「そうか、分かった。でも、さっきの妖怪はなんだったんだ？」

大和「あの妖怪は人魚だ。俺が持つ友人帳目当てで来たんだ。」

ヨンパチ「それにしてもあの人魚、」と言った

大和「あの人魚が何だ？」

ヨンパチ「美人だったな。それに結構胸もあったし。」

大和「つたく、お前は変態か？」と言って眠りに着いた

人魚話？

翌朝

大和達が川神市に帰る日になった

大和「さてと、とつとと帰るとするか。」と言ったときだった

岳人「なあ？もう一回人魚に会えないか？」と言って来た

大和「何故だ？」

岳人「いやゝ、結構美人だったし。」

大和「、、、運が良ければまた現れる。運お任せだな。」と旅館を後にした

その運任せが良いのか

また帰りにあの人魚が現れた

人魚「友人帳を置いていけ！」と襲ってきたので大和はパンチした

人魚のおでこに当たり人魚は倒れた

大和「あ、悪い。大丈夫か？」と手を差し出した

だが

人魚はその手を振り払った

大和「、、、でお前の名前は？」と言った

人魚は

人魚「人間如きに言う必要ないな。それに、」と何かを言おうとしたが大和は全く聞いていなく

ハンカチを近くにある水道で濡らしていた

人魚「って人の話を聞かんか！、、、まったくこれだから人間は。」と言った時だった

自分のおでこに冷たい物が触れた

それは

大和がハンカチで怪我した所を当てていたのだ

人魚「、、、。」と黙って受け入れた

大和「攻撃したのは悪かった。だが、友人帳は渡す事は出来ない。」
と言って岳人達と共に駅へと向かった

だが

人魚は大和に少し気になることがあるので人魚は魚に化けて

泳ぎながら追って行った

人魚が気になる事

それは

あの時

大和を本気で殺そうと首を絞めたのに

全く苦しむ素振りをしなかった

なぜ苦しまなかったのか

何故抵抗しなかったのかが気になったのだ

岳人「俺達、運が良いのか？また、あの人魚に会えたぜ。」

ヨンパチ「これも友人帳という物のお陰だぜ。」と喜んだ

すると

斑「大和、あの人魚が魚に化けて追っているぞ。どうする？」と斑が言った

大和「ほっておけ、友人帳は渡さないと聞いたんだ。襲ってきても大丈夫だ。何せ不老不死なんだからな。」

斑「それもそうだな。」と人魚が追っていることを知りながら川神市へと帰っていった

川神市に着き

大和達は自分の家へと帰っていった

島津寮に着くと

直ぐに風呂へと向かった

岳人「ふうふう、疲れが吹っ飛ぶな。」

大和「そうだな。」と言った

すると

岳人「大和、もしかしてあの人魚ってまた現れるのか？」

大和「俺達の後を追ったのならまた現れるだろう。」と言ってあがつた

食事を終え

大和達は疲れていたので

すぐに寝室に向かい眠りに着いた

翌朝になり

大和は

制服に着替え登校する準備をした

そして

何時もの様に風間ファミリーと共に学校へと向かっていた
すると

丸子橋（変態橋）に人魚が現れた

だが大和以外の者は全く見えていなかった

大和「あいつは？、まったくまたか。」と小さく言った

だが大和は早く行かないと遅刻するので人魚を無視して去って行った

その人魚も大和の後を追った

百代「じゃあな、三郎。」

三郎「ああ、ちゃんと勉強頑張れよ。」とキスを交わして百代は三郎を見送った

岳人「まったく目の毒だぜ。何時もあんなのを見せられるとな。でも、三郎さんが羨ましいぜ。あんな絶世な美女を手に入れてよ。」と嫉妬していた

だが

大和は全く聞いていなかった

そんな者より

人魚が気になっているのだ

まるでストーカーみたいに着いてきているのだ

大和「はあく、またあの人魚か。」と溜め息をしながら教室へと向かった

だが

人魚は流石に学校の中に入っては来なかった

大和「友人帳目当てだけでストーカーみたいに着いてくるか、普通。」と窓から人魚の姿を見て言った

恋心

下校時間になり

大和は風間ファミリー全員に緊急集会をしたいと言った

やはり

あの人魚も大和の後を追って行った

大和は全く気にしない状態で秘密基地へと向かった

風間「それで集めた理由は？」

大和「実はな、ほら岳人、旅行のお土産を渡そうと思ってたんだ。でも渡す時間が無かったからこのような形で渡すよ。」と旅行のお土産を渡した

中身はお菓子や果物だった

皆嬉しそうだった

風間「サンキョク、それでさ結局人魚に会えたのか？」と言った
すると

岳人「ああ、会えたぜ。しかもナイスバディーの人魚だったぜ、胸なんて百先輩以上だったよな？大和。」と言った

大和「え？ああ、まあな。ヨンパチに聞いて見た所3サイズ B

118/W 63/H 91だそうだ。」と言った後
岳人が声をあげた

岳人「マジかよ！」

大和「ああ、マジだ。確かに胸はその位あったな。」

岳人「でもよ、胸が大きくなると老婆になったら垂れ下がるんじや。
」と言った

だが

大和「オイ、岳人、人魚は老いたりしない。よって永遠にその姿を
保つ事が出来る。人魚だけではない。妖怪もそうだけ。」

岳人「そうか。じゃあ、垂れ下がる事も無いって事か。」

大和「まあな。」と言った時だった

ツトン

ツトン

誰かが階段を上がってくる音がした

大和「ん？誰かが上がってくるぞ？この気配は、」

岳人「どうした？」

大和「噂をすれば影が差したな、岳人、お前が人魚の話をしたから
その人魚がこっちに来るぞ。」

岳人「マジかよ？」

大和「ああ」と言った時だった

ドアがひとりでに開いたのだ

開いた場所から人魚が現れたのだ

だが

大和以外の人間は見えていない

大和「、、あのなあ、昨日も言ったが友人帳を渡す訳には行かないといったはずだが。」と言った

しかし

人魚「友人帳の事も気になるが今日は気になる事がある。」

大和「此処ではちょっと拙いな、屋上に行くぞ。」と人魚を連れて屋上へと向かった

屋上に着いた二人

大和「気になる事とは何だ？」と言った

人魚「あの時、最初会った時お前を本気で殺そうと首絞めたはずなのに何故お前は苦しまなかったんだ？」と言った

大和「なんだ、その事か。良いだろう、言ってあげるよ。霊能力者は20歳になったり死んだ人間を蘇らせたりお金を霊力で出したら不老不死になるんだ。俺は、死んだ人間を蘇らせたり霊力の力でお金を出した。よって俺は不老不死になったんだ。だから、お前が俺を殺そうと必死でやっても死なないんだよ。」と言った

人魚は驚いた

この人間は自分に優しく接した理由は

自分の血が欲しさに優しく接したのではないのかと思っていたのだ

だが

既に大和は不老不死になっていると分かった

人魚「そうか分かった、邪魔したな。」とこの場を去ろうとした

そのとき

大和「待て！えっと、、、。」と何かを言おうとした

だが

名前が分からなかったので何を言えば良いのか分からなかった

すると

人魚「私の名前は笹舟だ。」と名前を言った

大和「じゃあ笹舟、俺の傍に居てくれないか？一人じゃ寂しいだろう？」

笹舟「な！？お前の傍にだと！ま、まあ良いだろう。私も暇だったしな。」と言った

すると

大和「笹舟。」

笹舟「ん？なんだ？」と言った時だった

大和がキスをしたのだ

笹舟は何をしたのか一瞬分からなかったが

キスされたことが分かり嫌がる素振りをせず受け入れた

大和はゆっくりと口付けを終えた

笹舟「い、いきなり何をする気だ！」

大和「え？だから、これからも宜しく&傍に居て欲しいという証だよ。」

笹舟「そ、そうか。」と顔を真っ赤にしながら言った

笹舟の食事

笹舟を仲間にした大和は風間たちがいる部屋に行った

すると

風間「大和、それで人魚はどうしたんだ？」と言った

大和「人魚の名前は笹舟だ。笹舟は俺の仲間になったんだ。」

風間「そうか、でもどんな姿なのか分からないな。」

大和「知る必要ないだろう？それに笹舟は俺以外の人間は嫌っている。不老不死目当てで自分達の仲間を殺されたのだからな。さあ、笹舟、俺の隣に。」と笹舟を隣の席に来させた

一子「あ！そうだ！笹舟もお菓子食べるかな？」と言った

大和「聞いてみる。笹舟、お菓子食べるか？」と言った

すると

笹舟「悪いが私は人間食は苦手なんだ。」

大和「じゃあ、何が好みなんだ？」と大和は言った

笹舟は驚くべき事を言った

笹舟「人間の血が私の食事だ。」と言ったのだ

大和「おいおい、それがお前の食事かよ。」と苦笑いをした

一子「笹舟は、何が食事なの？」と一子は言った

大和「ワン子、人間の血が笹舟の食事だそうだ。」と言ったとき全員体が震えた

すると

百代「ならば私の血をあげよう。私は瞬間回復できるからな。さあ来い！笹舟！」と言った

笹舟「大和、誰だ？このふざけた女は？」と言った

大和「川神百代さんといって俺の姉代わりで結構の女好きなんだ。」

笹舟「大和、百代という馬鹿女に言っておいて。私は普通の人間の血には興味無い。靈感が全く無い人間の血は不味くて嫌いだと。」と言った

大和「ねえさん、悪いけど普通の人間の血には興味が無いってさ。靈感が無い人間の血は不味くて嫌いなんだって。」と言った

百代「な、なに〜〜〜〜！わ、私の血に興味無いだ〜〜〜〜！」とか
なりのシヨックをしながら言った

大和「やっぱり霊力がある俺みたいな血が興味あるのかな？」と笹舟に言った

笹舟「ああ、大和の血には興味があるな。どれ、少し味見を。」と
首筋に歯を当て血を出してその味を飲んだ

すると

笹舟「オオ〜！凄く美味しいな、気に入ったぞ。」ととどんとと血を飲んでいった

皆から見ると大量の血が大和の首筋から出ているのが見える

京「っちよ！大丈夫なの！」

大和「ああ、大丈夫だ。京、言っただろ？俺は死ぬ事は絶対にならない。」と言つて笹舟を抱きしめながら受け入れた

やっと満腹になったのか

笹舟は大和の首筋から口を離れた

すると

血が一瞬で止まった

やはり

不老不死の能力なのか

大和「満足したか？」

笹舟「ああ、満足したぞ。」

大和「そうか、それは良かった。」と頭を撫で撫でした

笹舟「これからも血を分けて貰うぞ。」
大和「ああ、良いぞ。」とお互いの存在を確かめるように口付けを
した

亡霊1

皆は知っているだろうか

731部隊の事を

第二次世界大戦期の大日本帝国陸軍に存在した研究機関のひとつで捕虜を人体実験して虐殺した部隊である

731部隊が使っていた建物は完全に無くなったと思われたが

何と川神市の何処かにその建物があるのだ

しかも

その建物の中には未だ人体実験にされた者達の遺体が凍り漬けの状態
態で保存されている状態で

更にゲームだけの存在のあの「ゾンビ」がその建物の彼方此方に夜
な夜な歩いているのだ

そう

731部隊はゾンビ開発の為に捕虜にゾンビになる為の薬を注射で
したのだ

その為死んでもゾンビ化をして頭を砕かれないと死なない苦しみな
から生きる屍状態になってしまったのだ

勿論

ゾンビに噛まれると噛まれた者もゾンビ化してしまう

助ける方法は無く殺す事しか出来ないのだ

だから

誰一人

探す事もしないのだ

っていうか存在すら知らないのだ

だが

風間ファミリー宛に手紙が送ってきた者が居て

その件で731部隊が使っていた建物が姿を現す事になるのであった

島津麗子は朝早くにポストの中身を見に行つた

すると

風間ファミリー宛の手紙が来ていた

麗子は直ぐに岳人達にその手紙を渡した

今日は祝日でお休みなので風間は風間ファミリーを全員秘密基地に
来させた

一子「それで用ってなに？今日は何かあるの？」と言った

風間「実はな、今日麗子さんがポストを開けたら風間ファミリー宛
の手紙が来てたんだ。」

クリス「ホホウ、それは珍しいな。」と言った

風間「内容はこうだ。」と内容を言った

風間ファミリー様へ

この黒い太陽のマークを探してください

この中には研究資料が残されております。

あとついでで宜しいのですが研究資料を持ってきてください

部屋の番号は5階の部屋の研究室にあります

もし見つけることが出来ましたら此処に電話してください

電話番号、、、、、、、、、

更に見つけ出してくれましたら賞金も差し上げます

謎の男性より

この手紙の内容がこうだった

風間「黒い太陽のマークだって？本当にあるのか？」と言った

一子「何でも良いじゃない。賞金も手には入れるし。」

風間「それもそうだな。よし！探しに行くか！明日、土日だし」と言った

だが

大和は険しい表情だった

京「どうしたの？大和。険しい表情して。」と言った

大和「いや、黒い太陽マークって何処かで聞いた事があるんだよな
って思ってたさ。だが、思い出せないんだよ。えっと、斑達は黒い太陽の事何か知っているか？」と聞いてみた

すると

斑「私も何処かで見た事があったような気がするんだが思い出せないんだ。」と他の者達も同じ事を言った

大和「へえ、斑達も思い出せない事もあるんだな。まあ、見つけたらきつと思いつけず別に良いか。」と言った

風間「よし！今からその黒い太陽マークを探しに行くぞ！」
皆「おお〜〜！」と叫んだ

だが

その黒い太陽マークはけして探してはいけない事だと風間ファミリ
ーは気付く事は無かった

亡霊2

風間ファミリーは黒い太陽のマークを探しに歩いていった

だが

そう簡単に見つかる筈も無くどんと時間だけが過ぎていった

風間「本当にあるのか？その黒い太陽マーク。」とキャップが言った

一子「わからない。、、、もしかしてデマ？」と疑いが出てきた

今は6月25日

まるで真夏みたいに暑い日である

クリス「それにしても暑い！あ！そうだ！あの森の中で少し休憩していかないか？」と言った

クリスが指差した森は

誰一人として入った者がいない森であった

そこは樹海よりも面積が広くて中に入ったら最後出られないような森であった

黛「それもそうですね。」と言って風間ファミリーは森の中へと入っていった

だが

不思議な事にまだお昼なのに

中に入ると夜みたいに真っ暗になった

師岡「ね、ねえ？帰り道ちゃんと分かっているよね？」と心配そうにモロが言った

大和「それに関しては問題ないよ。斑達がちゃんと脱出させてくれるから。」

師岡「そ、そう。じゃあ、安心だね。」と言った

風間ファミリーは

どンドンと前へ前へと歩いていった

すると

とても大きな建物が現れた

色は赤色に染まっていた

風間「お？この建物じゃねえか？」とキャップが走って行った

その建物に黒い太陽マークがあった

そう

風間ファミリーが探していた物に辿り着いたのだ

クリス「オオ〜！ やつとか？、で、中に入って研究資料という物を持って帰るか？」と言った

風間「それもそうだな。」と言って風間達は中へと入ろうとした
すると

ドアに嚴重な鍵を付けられていた

まるで

何かを外に出さないかように

風間「百先輩、お願いします。」
百代「任せておけ！」と言って嚴重の鍵を破壊して中へと入っていた

モロは中に入ろうとした時

看板を見た

看板に書いていたのは「731部隊 特設監獄」というのが書かれていたが関係ないと思い

中へと入っていった

だが

その行いが最悪なルートへと運ばれていくと知る筈も無かった

亡霊2（後書き）

731部隊 特設監獄とは、、、、窓一つも無く5mの壁に囲まれた脱出不可能の建物の事である。

亡霊3

風間ファミリーがその建物の中に入っていった

無論斑達も

風間「よしよし！さっさと研究室に行き研究資料を持って帰るぞ。」
一子「うん！」と笑顔で言った

だが

建物の中は

鉄分の匂いが全体を充満していた

岳人「何か鉄分の匂いがしねえか？」と口と鼻を抑えながら言った

クリス「ああ、結構な匂いだな。」と言った時だった

風間「よし！研究室までもう少しだ。」と言った

クリス達は匂いを我慢して行った

そして

遂に

研究室に着く事が出来た

ガラガラ

部屋を開けた

すると

沢山の本だらけだった

風間「確か、研究資料って言う物だ探そうぜ。」と言って全員探したが

色々な物があった

人体の模型

人体を絵で書いた本だらけだった

クリス「なあ？この建物ってなにを研究してたんだろう？」
岳人「さあな？さて、さっさと探すぞ。」と探して行った
すると

風間「あつたぞ！」と言った

百代「どういう物なんだ？」と興味深々の様子だった

風間は研究資料と描いている物を読んだ

中には

なんと

不老不死の情報があつた

風間「不老不死の研究資料だ。」

一子「本当？それでどうやって不老不死になれるの？」と言つた

風間「えつと、なんて書いているか分からないな。おい、大和、お前はどうか？」と大和に渡した

大和「どれどれ。」と読んでいった

すると

大和の顔がどんどん険しい表情になつていった

風間「どうだ？大和。」と言つた時だつた

大和「全員此処から早く走って脱出するぞ！」とノートを閉まつてその部屋を後にした

風間「お、おい！どうしたんだよ！」

大和「良いから走れ！出口まで走るんだ！」と慌てながら言つた

そして

出口に着く事が出来た

風間「まったく、出口に着いたな。さてと、外に出たら内容を言つて

もらっぞ?」とドアを開けようとした

しかし

ガチャガチャ

ガチャガチャ

不思議な事にドアが開かなくなっていたのだ

風間「え? な、何でドアが開かないんだよ? 百先輩、破壊して!」
百代「ああ! 任せる!」とドアを破壊しようとした

だが

壊れるどころか

ひびも入らなかった

百代「な、なんだと! 何故だ!」と言った

大和「姉さんの攻撃でも駄目か。仕方ない、今日は此処で泊まるしかないな。」と言って近くにあった椅子に座り込んだ

風間達も入って疲れたのか

椅子に座り込んだ

すると

一子「ねえ、大和。」

大和「なんだ？」

一子「やっぱし、霊能力者以外の人間も不老不死になれるじゃない！ねえ、ねえ？なれる方法を教えなさいよ。」と言った

だが

大和「この資料に書いていた不老不死の事か？」と言ってその資料ノートをビリビリに破いた

一子「ちょ！なんてことするの！」と言った

だが

大和「これ、不老不死になれる研究なんかじゃない。この資料に書いていた物は不老不死ではなくゾンビの研究だよ。」と言った

一子「ぞ、ぞ、ぞ、ゾンビって、あのバイオバザードっていうゲム出てきたのよね？」

大和「ああ、そうだ。ゾンビは頭を砕かれない限り永遠に生きる事が出来る。だから、この研究した者は不老不死と書いたのだから。」と言った

一子「そ、そうなんだ。、それで此処は何処なの？」

大和「此処は恐らく「731部隊 特設監獄」という所だと思う」と言った

大和が言った731部隊 特設監獄とは？

亡霊4

一子「731部隊 特設監獄ってなに？」と大和に言った

大和「まず、731部隊の事を言おう。」と説明を始めた

大和「731部隊とは第二次世界大戦期の大日本帝国陸軍に存在した研究機関の一つの事だ。まあ、難しい事を言うのはやめよう。簡単な事を話そう。簡単に言えば日本兵に捕まった朝鮮人、中国人、モンゴル人、アメリカ人、ロシア人を人体実験にしたんだよ。特設監獄は捕虜が絶対に逃げられないように造った事なんだ。わかった？」と言った

一子「じ、人体実験ってなにをしたの？」と震えながら言った

大和「凍傷実験、捕虜にした人を人為的に罹らせ、研究をした事。更に凍傷で手足が無くなった人は毒ガス実験に再利用された事や、毒ガス実験はガラス張りの実験室に捕虜を入れて毒ガスで志望していく経過を映画や絵画などで記録をとったり、まあ沢山の殺戮な実験をしたんだよ。」と言った

一子「酷過ぎる！」と顔を手で隠しながら言った

大和「だから、戦争など二度としてはいけないんだよ。、、ん？斑達が戻ってきたようだ。」と言った
すると

斑「大和、この当たり周辺に結界が張られている。」と言った

大和「結界だと！何で結界だなんてするんだよ？」
斑「恐らく私達を外の出られないようにする為だ。」
大和「そうか。それで、その結界を破壊するにはどうやるんだ？」
と言った

斑「この建物の中の何処かに結界を作っている場所がある。それを破壊しなければ脱出は不可能だ。」と言った

大和「この建物の何処かに結界を張っている場所があるみたいだ。それを探しに行こう。」とキャップ達に言った

風間「まあ、それしかないのなら行くしかねえな。」と言って全員で結界を張っている場所を探した

だが

この特設監獄の中は広過ぎて時間がかかってしまうのだ

それでも

大和達は探しに行った

一つ部屋づつ

何時間が経っただろうか

大和は腕時計を見た

時間は真夜中の2時になっていた

大和「真夜中の2時か、キャップ、何か出てもおかしくない時間だ。そろそろ何処かで休憩するぞ。」と言って大きな広間がある部屋に行き眠りに着いた

どの位が経っただろうか

大和はふと目を覚ました

何か嫌な気配がしたからである

一子「どうしたの？大和。」

大和「ワン子か、、、先程から嫌な気配がするんだ。何か寒気みたいな。」と言った時だった

ギョッ

バタンツ

広間のドアが開いた音がした

一子「な、な、なに、今の音！」

大和「ワン子、全員を起こさせる。現れたぞ。」

一子「あ、現れたってなにが？」

大和「人体実験された者達がゾンビ化して俺達を襲う。早く起こせ！」

一子「うん！分かった。」と言って風間たちを起こさせた

風間「どうしたんだ？」

一子「ゾンビがこの部屋に入って来ちゃったの！早く、此処から脱出しないと。」

風間「ま、マジかよ！」と立ち上がり辺りを見回した
すると

数え切れないほどのゾンビが自分達を囲んでいた

岳人「ど、ど、どうするんだよ！こんな沢山のゾンビ對抗できるわけねえだろ！」と怯えながら言った

すると

大和「安心しろ、斑達も応戦する。全員を倒せとは言わない。前に行く事だけを考えるんだ！」と言った

岳人「お、おう！」

大和「良いか？行くぞ！」と大和達はどんどんとゾンビを倒して行った

風間ファミリーは

大和の戦いぶりを見て恐怖さえ覚えた

大和「消え失せる。」と素手で容赦無く頭部を破壊しゾンビの活動を停止させた

それだけではない

鉄パイプを持つと神速のスピードでどんどんとゾンビを圧倒した

百代達の攻撃は無効化されているのに

そう

実は

ゾンビは霊能力者の攻撃しか効かないのだ

だから

百代達はこの時の場合は無力であるのだ

大和「さっさと冥界に立ち去れ。」と次々と倒していくとゾンビが恐怖したのか

次々と下がり始めた

大和「よし！こっちの廊下に行くぞ！」とゾンビの数で隠されていた廊下へと向かった

すると

斑「大和、その部屋に異常なエネルギー反応がある。その部屋が結界を張っている部屋だ。」と言った

大和「よし！皆、はやくその部屋に入るんだ。」とその部屋に誘導して部屋に入った

すると

結界を張っている装置が幾つかあった

大和「これか？これさえ破壊すれば俺達は外に出られる。」と大和は前に行つた時だつた

壁が破壊して大きなゴーレムが現れた

ゴーレム「ガツハハツハ！人間よ、中々やるではないか。だが、それもそこまでだ。我が名はゴーレムだ。その人間よ、結界を破壊したければ俺と戦え」と言つた

ゴーレム

死んだ人間の骨を融合させた物である

大和「チツ」と舌打ちをしたのだ

自分はさつさと帰って寝たいのにこんな奴等と勝負しないといけなのかといライラしていた

ゴーレム「くらえ〜〜〜！」と攻撃を大和にやつた

だが

大和「うざい」と言つて後ろ向き状態でゴーレムを鉄パイプで一瞬で切り裂いた

ゴーレム「ば、ば、馬鹿な！」と言つて粉々になり塵となつた

大和「フン、弱いくせにこの俺と勝負なんてするなよ。」と殺気を出しながら言つて結界装置を容赦なくぶつ壊した

大和「よし！結果装置破壊完了。斑、キャップ達を頼んだぞ。」
斑「ああ、分かった。」と言って風間ファミリー達を連れてこの建物から脱出させた

大和はあとから

オシリスの天空竜の上に乗って来た

オシリスの上には笹舟も乗っていた

笹舟「大和、このドラゴンでなにをする気なんだ？」

大和「このドラゴンは俺の言葉によって攻撃力を上げる事が出来るんだ。だから、攻撃力を無限にさせあの建物を消滅させるんだよ。

あんな忌々しい建物は無い方が良くないからね。」

笹舟「そうだな。人体実験にした建物をさっさと破壊しよう。」と言った

オシリスをこの建物の上空に待機させた

大和「よし！オシリス、この建物を容赦無く消滅させるんだ。」

オシリス「うん！任せて。」と言って口を開けその建物に攻撃をした

オシリス「超伝導波サウンダー・フォース！」と言って攻撃をした

すると

その建物がゾンビごと跡形も無く消滅した

それを見た風間ファミリーの感想はというと

風間「、、、、、、」
一子「、、、、、、」
百代「、、、、、、」
岳人「、、、、、、」
師岡「、、、、、、」
クリス「、、、、、、」
黛「、、、、、、」と全員呆然としていた

破壊力が強過ぎるからである

大和「させと、消滅した事だし家に帰って寝るとするかな。なあ、
笹舟、オシリス？」と言った

笹舟「ああ、寝よう。」
オシリス「はい！マスター。」と言った

大和はオシリスの上に乗りながらキャップ達の所へ来た

大和「さてと、斑、姉さん達が住んでいる川神院まで送って行って
くれるかい？」

斑「ああ、分かった。」
大和「じゃあ、頼んだよ。」と言って斑を川神院に行かせた

島津寮の皆はオシリスの天空竜の上に来させたのだ

だが

姿が見えていないので大和の指示をした所に来させて島津寮へと帰
って行った

その頃

川神姉妹はというと

実家に着く事が出来て

川神院へと入っていった

すると

鉄心「この馬鹿者が！」と怒られていた

それは当然である

もう既に夜中の3時を回っていたからである

説教をさせられ

百代達は寝室へと向かった

だが

眠れなかった

何故なら

大和の攻撃力

そして

あの冷酷心

まるで

性格が別人になっていた事に気になって眠れなかったのであった

七夕祭り？

7月5日

大和は目を覚ました

すると

風間「おゝい、大和。」とノックもせずにキャップが部屋に来た

大和「ノックぐらいしろ。ゝゝゝで何のようだ？」

風間「今から集会があるから集まってくれ。」

大和「集会だと？こんなあさっぱから。」

風間「良いから行こうぜ？」と服を引っ張った

大和「分かったから引っ張るな！」と言ってキャップに言い手を離してもらった

大和は服を着替えて秘密基地へと向かった

すると

既に全員揃っていた

風間「お！全員揃っているな。よし、今から集会を始める。」と言った

大和「それで今日はなにをするんだ？、まさか、任務とか言わないよな？」

風間「安心しろ。今日は、任務は無い。今日集まったことはなもう直ぐで七夕祭りがある。皆はどうするんだ?」と言ってきた

七夕祭り

川神院で1年に一回行われる祭りの事である

岳人「そりゃ、行くに決まっているだろう。」

風間「そだよな、、、で百先輩は石田三郎さんと一緒に行くのか?」
と言った

百代「そりゃあな。恋人はいつも一緒だからな。」と自慢げに言った

やはり全員行くといった

だが

大和「、、、。」と何かを考えていた

風間「どうした?」

大和「え?いや、斑達も行くのかなと思ってな。」
風間「聞いてみたら?」

大和「そうだな。斑、返事しろ。」と言った

すると

斑「どうした?大和。」と姿を現した

大和にしか見えないが

大和「七夕祭りに行かないか？」と言った

斑「七夕祭りだと？ああ、川神院でそんな行事があったな。まあ、お前が行くのなら行く。」

大和「そうか。それでオシリス達は？」

斑「待つてる、今聞いてみる。」と言つて去つて行った

1分後

斑が戻ってきた

斑「行くつてさ。」

大和「そうか。じゃあ、人間化して祭りに行こう。」

斑「分かった。日付は7月7日で良いんだな？」

大和「ああ、そうだ。じゃあ、夜7時だから6時半ぐらいに島津寮を後にするぞ。」

斑「分かった。そういえば浴衣持っていないぞ？」

大和「そうだな。じゃあ、今日買いに行くか。」

斑「分かった。」と言った

大和「斑達全員行くつてさ。人間化している状態で。」

クリス「人間化すると見えるようになるのか？」と聞いてきた

大和「ああ、靈感が無い奴でも見える。確か、岳人は見た事があるよな？樹海から出て旅館に来た時見ただろ？」と言った

岳人「おう。いや、美人だったよな、胸なんて百先輩よりもあったしな。」と変態な事を言った

すると

大和「一応言っておくが絶対に手を出すなよ？俺以外の人間を嫌っている。相手にしたら容赦なくボコボコの状態だからな。」と言った

一子「何で人間を嫌っているの？」と言ってきた

大和「当たり前だろ？この前も言ったが人間は自分達の居場所を破壊してきたんだよ。だから人間を嫌っている。」と言った

すると

大和「そうだ。皆の浴衣はどうするんだ？持っていなかったら一緒に買いに行くが。」と言ってきた

だが

持っているといった

大和「そうか、じゃあ、斑達の浴衣を買いに行くか。じゃあ、キャップ、俺はデパートに行って買いに行くから。斑、行くぞ？」と言つて窓を開けて背中に乗って去って行った

残されたキャップ達はどうと

風間「霊能力者って便利だよな。いくらでもお金を出す事が出来るんだから。」

師岡「うん、そうだね。」と言つて自分達も去って行った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1869t/>

孤独

2011年10月8日05時06分発行